

「はい、友達です」

「唯の友達ですか？」

「はい、そうです」

「亜希子があなたのことを好いているようですが」

「はい、奥様からも伺いました」

「あなたは亜希子のことをどう思っているのですか？」

「僕も亜希子さんのことは好きです、人間として」

「好きということは、一緒に居たいということですか？」

「それはどういう意味でしょうか？」

「つまり、将来は結婚したいと思っているかということだが」

「僕は、今は誰とも結婚する意思はありません。これからどう変わるかわかりませんが」

「もし、亜希子がどうしてもあなたと結婚したいと言ったら、どうするつもりですか？」

「亜希子さんは僕を理想化して見ていると思うのです。僕はそんな理想的な人間ではありません」

「どういう点で理想的でないと言うのかね」

「以前、亜希子さんは僕と一緒に世界の苦しんでいる人々を助けることに一生を捧げたいと仰っていました。でも、僕にはそんな高邁な思想はありませんし、亜希子さんの様な純粋な方に相応しい人間だとも思いません」

「それでは、亜希子のごことは一人の女性としてしか見ていないということかね」

「いいえ、この上ない友達です。亜希子さんと居ると、絶対守ってやりたいという思いが生じてきます」

「直接的な話で済まないが、亜希子とはどこまで進んでいるんだね」

「時々亜希子さんが何かには怯えているようなときなどに、手を繋いで歩くことがあります」

「それだけかね」

「はい、それだけです」

「あなたは、亜希子と一緒に山陰に旅行に行っただろう？」

「はい、行きました」

「何をしに行ったんだね」

「失踪事件の調査をするために行きました」

藤代は詳細の質問はしなかった。

「亜希子もそのために出掛けたのかね」

「いいえ、亜希子さんは僕の調査を助けてくださったのです」

「それは、どうしてだと思っね」

「亜希子さんは僕と一緒に行動したいと思っているようです」

「君もそれを受け入れているわけだ」

「はい」

「君は女性のそのような行動に、責任を取る用意があるのかね」

ここで賢はしばし応えに窮した。

「責任と仰いますと、どのような事でしょうか？」

「つまり、男と女が必然的に陥る道だよ」

「そんなことにはならないと思いますが、万が一そのような結果になってしまったら、障害となるあらゆる状況を排して亜希子さんと共に生きます」

ふたりは箸を止めて話し込んでしまった。藤代は緊張を和らげるかのように少しほほえんだ。

「やあ、済みませんでした。娘の事が心配で、つい追求するような話し方になってしまって」

「いいえ、僕は感謝しております。こんな風にお話をさせて頂いて、とても嬉しく思います」

「さあ、料理が冷めてしまったかも知れないけど、箸を進めてください」

「ありがとうございます」

「個人的なことを聞いてもいいですか？」

「はい」

「ご両親は？」

「いま、アメリカに住んでいます」

「アメリカのどこですか？」

「フェニックスです」

「あそこは暑いですね」

「はい」

「大学はどちらを？」

「フェニックス大学理学部を卒業しました」

「今は、何の仕事をしているんですか？」

「つい2週間まではWEC社に勤めていましたが、今は退社して仕事はしておりません」

「起業でもするつもりですか？」

「今はまだ、はっきりした意志を持っていません。いずれはそうなるかも知れません」

「では、どうして会社を辞めたのですか？」

「どうしてもやりたいことがありましたので、思い切って辞めました」

「それはどんなことですか？差し支えなければ教えてくださいか？」

「一寸説明しにくいのですが、時空間に関する疑問を解こうと思いきり、最近の失踪事件を調査するために辞めました」

「この間の山陰の旅行もそれが目的だったんだね」

「はい。それから、昨日まで花巻に行っていました」

藤代は黙って頷いた。亜希子が花巻に行ったことについては触れなかった。藤代はビール瓶を手にして

「どうですか？」

と言った。賢は

「ありがとうございます」

と言って受けた。

「亜希子が君たちの住んでいる住まいの近くに住みたいと言っているが、知っているかね？」

「はい、奥様から伺いました」

「よろしく頼むよ」

「はい、わたくしたちの方こそよろしくお願ひ致します」

食事が済むと、藤代は賢を送ると言った。賢は恐縮して辞退したが、賢達の住んでいる地域を見てみたいと言うので、お礼を言って藤代の申し出に甘んじた。運転手が黒のサクセスを笹亭の入り口に着けていた。ふたりは後部座席に座った。藤代は運転手に、賢の家に寄るように言った。賢が自分の住所を言うと、ナビゲーションシステムが住所を繰り返して応答した。賢は音声認識のあるナビゲーションシステムだと思った。藤代が

「そろそろ夏も終わりだな」

と独り言のように言った。

「亜希子を助けてくれてありがとう」

「えっ」

「七年前のことだ」

「あっ、いいえ、当然のことをしたまでです」

運転手は賢のアパートの前で車を止めた。

「きょうは、ありがとうございました」

そう言って賢は車から降り、車が見えなくなるまで見送った。賢が部屋に入ったのは九時半を少し回った頃だった。賢は窓を開放してから、シャワーを浴びた。そのままになっていたスーツケースから2冊のノートと数馬、亮子へのみやげを取り出して、書棚に置いてから衣類を取り出すと洗濯機に投げ込んだ。夜洗濯をすると一階の部屋から苦情がくる。いつも、溜まった洗濯物を朝洗濯している。記録ノートを書棚から手に取りぱらぱらと開いてみた。花巻の記録のページにはゆきの家のことについて多く書いてある。「ゆきの家はどこか別の世界への入り口のような」という一節が目にとまった。初めてゆきの家を訪れた時の印象だ。縁側から部屋の奥を見ると暗く、それでいて陰湿でない世界に繋がっているように見えた。そこから子供達があの不思議なボールを持って飛び出して来たのだ。ゆきが現れるのもあの奥の部屋からだった。奥の部屋が台所に通じているのは確かだが、そのような印象は受けなかった。「あそこにはまだ野岸孝子が居ると感じる」と書いてある。賢は自分の仮説がいずれは確認できると感じた。ただ、今はその時期でないことも分か

る。あまりに危険だからだ。竜巻の起きたとき、ガラスの中に石がめり込むことがある。それもガラスが割れず、石とガラスが重なったところで溶解して一体になったような形になる。この現象は力の作用によるものだと考える学者が多い。第2次世界大戦中に米国のフィラデルフィアで行われた実験の話も聞いたことがある。強い電磁気を掛けると駆逐艦が消滅し、2500 km離れたノーフォークまでテレポートした。乗船していた水夫が消えたり現れたりする症状に悩まされたり、壁の中に身体がめり込んで出てこれなくなった水夫もいたと聞く。こんな形で野岸孝子が戻って来ることは許されない。中国の医師のグループが人の内臓に出来た腫瘍に意志を作用させて、消し去ったという話も聞いたことがある。実際、亮子の筋腫も自分と祐子の集中した意志の作用で消滅したようにも思える。障害物を消すときには利用できるかもしれないが、しかし、その消えた腫瘍の行方が分からない。これは今の野岸孝子達の状況と同じだ。亜希子のテレポーターションは量子科学で確認された実験結果で説明できる。量子の世界では原子が一カ所に二つ重畳して存在できる二重存在性や、一つの存在が同時に二箇所にも存在することも確認されている。現象としての事実はある。しかし、亜希子は3日間所在が分からなかった。これがはっきりするまでは、下手に意識を作用させると危険である。賢はこれらの現象を数学的に証明できれば、この消滅事件が解決できると思った。この現象を解く鍵は複素時空間にあると賢は考えている。宇宙の90パーセントが分かっていない。宇宙科学者がダークマターなどと呼んでいるブラックホールの存在も推定されている。そうであればホワイトホールは何処にあるのか？それは一体何なのか？人間のDNAの九十パーセント以上が使われていない。DNAに光を当てるとその形が空間に記憶され、転写できる状態になる。これらのバラバラな現象を一本の線で繋ぎたいと思った。フォログラフィックな宇宙を想定する科学者が最近多くなってきたが、それも3次元現象的な意味合いが強い。科学者達があまりに現象世界に捕らわれ過ぎているから、現在の科学ではクローンすらまともに作れない。現在の科学が解明できていない様々な事象が、賢の頭の中を駆け巡った。

賢はふと数馬が話していた原智明の事を思い出した。原智明の研究会が発足したと数馬は言っていた。天才肌だった原智明という男について、数馬に聞いてみようと思った。賢が電話をすると、数馬は喜んだ。数馬のエネルギッシュな声を聞くのは久しぶりだった。明日全員集まろうということになった。賢が祐子と亜希子に、数馬が亮子に連絡することになった。先ず亜希子に連絡した。祐子とは長くなると思ったからだ。亜希子のスマホは呼び出し音が5回鳴って不在メッセージが応答した。賢は「もし来れたら来るように」とメッセージを残した。祐子は直ぐに電話に出た。

「電話、待っていたわ。さっき電話したのよ。でも居なかったから心配してたのよ」

祐子の明るい声が聞こえてくる。

「祐子、明日みんなで会おうってことになったけど、11時にあのレストランに来れるか？」

「うん、大丈夫。全員集まるの？」

「そうだ。亮子さんには数馬が連絡する。亜希子さんには伝言を残したよ。ところで、今日亜希子さんのご両親に会ったんだ。ご両親が心配していらして、いろいろ質問されたよ」

「そうなの。亜希子さんが居なくなったんだから、ご両親が心配するのは当然よね」

祐子が意外に冷静なのに賢はほっとした。

「今日はね、あなたに頂いた色紙に久しぶりに絵を描いているの。出来たら明日見せるわね」

「うん、楽しみだな。じゃあ、明日」

「お休みなさい」

次の日は土曜日で休日だった。もっとも賢と亜希子には休日という感覚はない。賢は数馬と亮子へのみやげを手にする、少し早めに出掛けた。レストランに着いたのは十時二十五分だった。賢は窓際の円形テーブルを選んで座った。すぐに祐子が入り口から姿を現し、手を振った。

「早いじゃないか」

「あなたが早く来るような気がしたの」

祐子は賢の隣に座ると、耳元で

「あなた、描けたわよ」

と囁いた。天橋立の絵だった。下地の和紙の不均一な紙面に、水彩絵の具の重ね塗りで霞を懸ける手法で描かれている。右側の手前に小さく肩を寄せ合った男女の後ろ姿が、景色の中に溶け込むように描き込まれていた。郷愁を感じさせる絵だった。

「これはあなたと私よ」

祐子が言った。賢は感慨を持って色紙を見つめていた。ウエイトレスが水のグラスを二つ持って来た。ふたりは少し待つように頼んだ。

「今日、亜希子さん来るかしら」

「さあ、どうかな。亜希子さん、この近くに越して来るかも知れないぞ。今日はアパート探しで忙しいかも知れないな」

「ほんと？」

「多分ね」

「なぜ、ここに来るのかしら？自分の家があるのに」

「一人で生活してみたいようだよ。だけどやはり知り合いの居る場所がいいんじゃないかな？」

賢は亜希子が自分の近くに来たがっていることは話さなかった。祐子の明るかった顔が少し硬いイメージに変化した。その時亮子が入り口の扉を開けた。亮子も手を振ってから賢達のテーブルに来て、祐子の横に腰掛けた。前回会ったときよりずっと生き生きした感じがする。

「きのう数馬さんから電話を頂いたわ。みんなが集まるなんて、なんか久しぶりのような気がするわ」

賢が言った。

「亮子、元気そうだね。身体の方はもう大丈夫？」

「ええ、おかげさまでもうすっかり良くなったわ。みんなに心配懸けちゃって」

「本当によかったわ」

祐子も嬉しそうに微笑んだ。丁度十一時に数馬がやって来た。

「やあ、みんな早いじゃないか。元気か？今日は亜希子さんも来るのか？」

「いや、一寸分からないな。留守電にメッセージを入れといたけどな。今もう一度電話してみるよ」

賢は二つの紙袋を取り出し、数馬と亮子にみやげだと言って渡した。ふたり同時に

「ありがとう」

と言った。音程の異なった同じ言葉がハーモニーを作り出して、美しく響いた。賢と祐子は思わず顔を見合わせて微笑んだ。賢は席を立てて入り口の脇に設置されている公衆電話で亜希子のスマホに電話を掛けた。亜希子が出た。

「わたくし、いまアパートの契約の為に母と一緒に不動産屋さんに来ているのです。多分あと一時間くらいしたらそちらに行けると思います」

「アパートは決まったの？」

「はい、賢さんのアパートの斜め向かいにあるアパートです」

「そう、それはよかった。じゃ、後でな」

賢は自分のアパートの近くには18階建てのマンションしかないはずだと思ったが、それは亜希子が来てから聞こうと思った。電話を切って席に戻ると、ウェイトレスが注文を取っていた。賢は席に戻ると、

「おれはアイスコーヒー」

と言った。皆きよとんとした顔をした。

「もう11時を過ぎているから、ランチを頼もうってことになったんだけどな」

「そうか、じゃ俺は日替わりランチ」

祐子が言った。

「メニュー、見なくてもいいの？」

「うん」

「承知致しました。日替わりランチを四つでございますね」

「はい、お願いします」

数馬が応えた。

「なんだ、みんなも日替わりランチじゃないか」

「でも、みんなはメニューを見たのよ。今日はおいしそうよ。賢くん運がいいわ」

祐子が流し目で賢を見ながら冷やかした。数馬が全員を見回して言った。

「最近集まる機会が無かったから近況から報告しようか？」

「うん、それがいいな。じゃあ初めに数馬、おまえから話せよ」

「分かった。俺はこここのところ、例の鹿児島ベンチャーとの契約で忙しかつた。それも今週一杯でやっと片付くんだ。相手が契約書の作成方法に附いてよく分かっていなかったから、結構手子摺ったよ。でももう終わった。例の原智明研究会だけど、東京の目黒に事務所が出来たんだ。俺も一度行ってみたけど、一寸難しい話が多くて附いてゆけなかったな。まだメンバーは五人しかいないんだけど、鹿児島と違って、事務所はメンバーの中の勾島という大学助教授の自室を使っているんだ。君たちも一度行ってみるといいよ。土曜に定例ミーティングがあるらしいな。賢なら彼らの話分かるかも知れないぜ」

そう言うと数馬はテーブルのナプキンを取り、その上にボールペンでゆっくり勾島助教授の電話番号を書いて賢に渡した。

「どんな話をしているんだ」

「先週の土曜日に行った時は、人間のDNAの話をしていたな。原君の話によると、人間のDNAはこの世界に關与できるとの事だよ。簡単に言うと、つまり自分のDNAの情報を使って周りの世界を変えることができるってことだよ。勾島助教授は何でも、「光が關係しているらしい」って言っていた。俺には何のことだかよく分からなかったけどな」

「この世界がフォログラフィックな写像の世界だと仮定すると、その元となる像はどこにあるのか、誰が作ったのかということになる。どうやら、それを解く鍵がDNAの中にあるようだな。海の老人が言っていた人間は光しか見ていないという言葉が浮かんでくるな」

その時祐子が口を挟んだ。

「わたしもロシアのポプキンスの最新情報を雑誌で読んだことがある

わ。DNAの幽霊現象の研究が行われているって。DNAに強い光を当てると、DNAが独自の光の情報を作り出すって書いてあったわ。それでDNAを取り除いても、その光の情報だけが残るようだよ。よく分からなかったけど」

「その残った光の情報も一種のフォログラフィックな写像、つまりフォログラムだと思うよ」

賢の言葉を聞くと、数馬が軽く頷いて再び話を戻した。

「途中から話が横道に逸れちゃったけど、俺の最近の情報はそんなところだな。賢はどうなんだ？」

賢は花巻での出来事を話した。特に野岸孝子の失踪と、ゆき、太郎、信次の話を中心に説明した。亜希子の事には触れなかった。祐子は賢が亜希子の事に触れないことに少し苛立ちを覚えた。次に亮子が近況を説明した。

「みんなに心配掛けちゃいましたけど、わたくしの子宮筋腫は完全に無くなりました。先生も不思議がっていました。近頃は生活にも張りが出てきて、体重も元に戻ってきました。再発を懸念して激しい運動は避けています。最近は韓国映画に凝っています。今度誰か一緒に見に行きませんか？」

祐子が頷いた。

「俺も韓国映画が好きだな。特に女優がきれいだ。衣装もいろいろ凝っているし。今度連れてってもらおうかな」

そう数馬が言うと、亮子は

「数馬さん、忙しいから、時間が出来たら連絡ください。わたくしが案内します」

と言って一寸恥ずかしそうにした。祐子が

「さて、今度はわたしね」

と言った時、ドアが開いて、亜希子が入って来た。亜希子はドアの所で、四人に向って頭を下げた。席に近付くと

「遅くなってごめんなさい」

と言った。

数馬と亮子が席を詰めたので、亜希子は亮子の隣に座った。座った時、亜希子は賢の方を見て会釈した。少なくとも賢にはそう思えた。しかし、他のものにはそれとは分からないほど微妙な会釈だった。祐子が言った。

「亜希子さん、お食事は？」

「わたくし、まだ食事は頂いておりません」

その時ウエイトレスが二人分の食事を持って来て賢と祐子の前に盆を置いた。祐子が言った。

「亜希子さんも注文するといいわ」

ウエイトレスは亜希子に会釈をした。

「亜希子さん、いらっしゃいませ」

「わたくしも、皆様と一緒に食事を頂きたいのですが」

ウエイトレスは頷いた。少ししてウエイトレスは更に二人分の食事を持って来て、数馬と亮子の前に置いた。四人が食事に手を付けずにいるのを見て亜希子が遠慮がちに言った。

「どうぞ、お先にお召し上がりになってください」

四人は食事を始めた。ほんの一分ほどで、ウエイトレスは亜希子の定食を運んで来た。あまりの早さに他の客の分を廻して来たのは明らかだった。亜希子はウエイトレスに会釈してお礼を言った。亜希子も食事を始めた。祐子が近況を話し始めた。

「山陰から帰ってからは特に大きな出来事は無かったわ。変わったことと言えば、賢くんと一緒に新宿のVEAS館に行ったことかしら。あそこはいろいろな仮想体験ができるのよ。そう、亜希子さんも島根にあるVEAS館に行ったのよね。数馬さんと亮子も行ってみると面白いわよ。物の見方が変わるわ」

賢がフォローした。

「そう、あそこは自分が存在していることを意識できる絶好の場所だな。なかなか面白いぜ」

数馬が言った。

「そうか、行ってないのは俺と亮子さんだけか。亮子さん、今度一緒に

行ってみようか？」

亮子は「ええ」とかわいらしい声で、少し恥ずかしげに応えた。顔が紅潮してくるのがはっきり分かった。賢と祐子はふたりの関係を隠し通した。五人は食事をしながら話を続けた。祐子が亜希子の方を見て言った。

「次は亜希子さんの番ね。近況を報告してね」

亜希子は自分の最近の状況が尋常でないことを意識していた。少し目を伏せて「はい」と応えた。

「亜希子さん、皆に話せることだけでいいぞ」

賢が助け船を出した。

「はい、わたくし今度皆様のお住まいの近くに引っ越して来ることになりました。よろしく願い致します。明日からはこちらで生活します」
そう言うのと亜希子は四人に自分の住所を書いたメモ用紙を1枚ずつ渡した。それを見ると、数馬が

「俺たちのアパートの前だな。ということはあそこのマンションか。亜希子さん、あの18階建てのマンションに引っ越したの？」

「はい、両親がセキュリティの事をとても気にしまして、それにこの近くでは丁度いい空き部屋があそこにしか見つからなくて・・・」

賢が言った。

「亜希子さん、何か手伝うことはないか？」

「そうよ、何でも仰って」

祐子がそう言うと数馬、亮子も頷いた。

「ありがとうございます。でも、引っ越しは専門の会社に頼みましたので大丈夫です」

「今日は何時頃に引っ越しが済むのかな？」

数馬が聞いた。

「はい、夕方5時には終わる予定です。今荷物が送られているところだと思います」

「それは忙しいな。終わったら皆でお祝いの一杯会をやるか？」

数馬が力強く言った。

「そうだな。久しぶりにみんな集まったから、駅前のビヤホールに繰り

出すか？」

一応賛成はしたものの、賢は亜希子の精神的負担が気になった。

「亜希子さん、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「よし、それじゃあ、駅前のヘラクレスのビヤホールに7時集合ってことにしよう」

「わたくしはこれから少し引っ越しの立ち会いに部屋に戻ります。また夕方、よろしくお願い致します」

亜希子が自分の食事代を数馬に渡して席を立った。亜希子が離席すると、賢は失踪事件について自分がこれまでに認識できた事項を説明した。先ず初めに早瀬由美、次に江川勝児、そして野岸孝子に附いてその失踪時の状況、続いて失踪後の経過の説明を行った。失踪後にコンタクトができたのは早瀬由美だがそのことは話さなかった。淨蓮の滝での約束があったためである。約束を破った時の仕返しを恐れたわけではなかったが、あの滝の女性の存在に不確定さが伴っていたからだった。祐子は賢が見えなくなった時のことを思い出したが、賢がそのことに触れなかったため敢えて口にするのは止めた。賢はこれまでの調査結果から、調べた3人はいずれも現実の世界とは異なった時空間に移動してしまったと思われると言った。そして、それを引き起こす原因についてはまだ分からないが、その空間から引き戻すためには、この現実の空間にいる者と異なった時空間にいる者が相互に強い意志で相手を呼び求めることが必要なようだと説明した。数馬は暫く黙って聞いていたが、

「うむ、しかし、どうしてその異なった時空間が存在するって言えるんだ？」

と言った。そして少し語気を強めて続けた。

「現に、俺たちはそんな空間を見たことも聞いたこともない。それは昔から神秘世界という名前で語られてきたことと同じだと思うけど。だけど誰も実証していないじゃないか」

賢は少し微笑みを浮かべて応えた。

「確かに一般の人たちの誰にでも分かるようには説明されていないと思

うが、異なった時空間は、俺が考えるには、この世界の尺度では説明できないようなものなのじゃないかと思うんだ。だから説明しても誰も理解できなかったんじゃないかな。そもそも言葉での説明自体が難しかったのかも知れない。それがどういうものか理解できた人たちは、比喩を使って自分たちの体験したことを説明しようとしてきたんじゃないかな。現在俺たちはその説明を科学的な言葉を使って、表現できるような時代に生きていると思うんだ。きっと誰でも分かるように説明できる日がくると思う。そうだろう、光学的に光の動きが見えてきたし、量子科学で素粒子の動きが分かってきた。それで、その位置を統計的に表現できることも分かってきた。その上、人間の意識が素粒子に作用を与えることができることも分かってきた。DNAの事もかなり分かってきた。DNAが自分の複製を作る仕組みを持っていることも分かってきた。数学的にも複素関数の世界まで理解できるようになった。まだ分からないことの方が多くけど、既に解明したことで、人間が、見えない別空間を認識できるようになればいいだけじゃないかと思うんだ。もっともそれが一番難しいかも知れないけどな」

祐子が言った。

「わたしたちは光を通してものを認識していることは確かね。だから、可視光の領域で表現された形態だけが存在として認識できるのね」

亮子が言った。

「でも、目の見えない人も自分の周りの世界を認識しているわ」

「それはその通りだけど、盲人が耳で聞いたり肌で感じたりするのも広い意味では光と同じ振動するエネルギーだと思うんだ。勿論、それから造形する為には自分の想念を駆使しなくてはならないけど、生まれつきの盲人は俺たちが見ているような形の世界は想定できないと思う。だけど、どうやら人間の脳は人類の共通の記憶にアクセスできるようだから、過去世の記憶に自分の生きた時の形態が残っていれば、脳は目が正常に機能していた過去世の情報から現実を創造できるかもしれない」

「賢、それで何とか別空間が存在することを証明できると思うか？」

「うん、俺はそれをやり遂げようと思っている。今、人類に一番必要な

のはこのことだと思う。つまり、本当の世界を知る事だと思うんだ」
「人類にその認識が出来上がっても、分からない人には最後まで分からないと思うぜ」

「大多数の人が同じ認識に至ると、新たに生まれてくる人間は異なった時空間を認識できるDNAのスイッチが自動的にONする、つまりRNAが活性化した状態で生まれてくると思う。そして、社会の基盤が変化してゆくと思う。集合意識として世界が定義されるんじゃないかな。だって、今だってほとんどの人は何も分からないけど、この奇跡的な空間を共有して生きているじゃないか」

「それで、何か解明の糸口のようなものは掴めたのか？」

「糸口とまではいかないかも知れないけど、俺はこの見えない空間を認識する鍵がエネルギーにあるような気がする。最小二乗法でいう「打ち消し合う存在」が見えるようになるし、虚数の二乗で実数化ができる。二乗するということはエネルギー化することと等価だと思うんだ。だから見えない空間の実体を如何にエネルギー化するかがポイントだと思うんだ。インドの古いタントラの秘法の中に、第3の眼を開く技法っていうのがあるんだ。第3の眼はこの次元の目ではなくて、別次元の眼なんだ。2つの眉毛の中間、額の内側1センチメートル程の処にあるらしい。それも3次元に転換しての話だから少々難があるけどね。その眼を開くと多次元が見えるようになるらしい。この第3の眼は2つの目に注入されているエネルギーを切り替えて注ぎ込むことで開くと謂われているんだ」

祐子は輝くような目をして話している賢をうっとり見つめていた。そういう時の賢の姿が一番好きで、尊敬し敬愛していた。亮子は

「わたくしは、もう附いていけないわ」

と言った。数馬が話の方向を変えた。

「そうだな、少し現実的な話をしよう。うちの会社にすごく金持ちの人がいたんだ。彼の家は入ると吹き抜け天井の空間になっている。そこから少し奥に進むと、まるで料亭にでも行ったように屋内に内庭が作り込んであって、その^{かけひ}窠から水がしたたり落ちているんだ。彼はいつも

その内庭を眺めて「自然は美しい」と思うらしい。玄関の脇には電動のキャリングカーが置いてあって、起伏のある廊下を何の苦もなく移動できるようになっているんだ。この家は何でも自動化してあって、リモコンのスイッチ一つで窓やカーテンが開け閉めできるし、廊下の奥にはエンターテイメントルームがあって、そこの部屋に入ると自動的に天井からスクリーンが降りて来る。ソファに座るとソファが体型を感知して最適な位置と傾斜角度に設定される。8Kハイビジョンディスクの映像は自動的にネットからダウンロードされて、スクリーン上に一覧表示され、音声で「一番目」「二番目」と言ってその中の好きなものを選ぶと部屋の照明が暗くなって自動的に再生が始まる。身体を寛がせてそのまま鑑賞ができる。音量も座ったまま、「大きく」「小さく」と口にするだけで調整できる。寝室も完全自動化されていて、部屋にある大型スクリーンのテレビが天井に取り付けてあり、寝ながら鑑賞できる。すべてが万事こんな感じなんだ」

亮子が口を挟んだ。

「すごいわね、夢のような生活じゃないの。わたくしもそんな家に住んでみたいわ」

数馬が亮子の方を見て少し微笑んでから

「そんなすごい家に住んでいるんだから、さぞ気前がいいだろうと考えるけど、彼は酷いケチで一円の金でも損をしないようにして生活していたんだ。会社でも人を押しつけて出世を図ったんだな。だから金が貯まった。その金を家の快適生活に注ぎ込んでいたようだな。彼は最終的には役員にまでなったけど、半年前に役員を退任したんだ。なんでも、それから1ヶ月も経たないうちに両膝の関節を痛めて歩けなくなっちゃったんだ。足を使わなかったから筋肉が弱って関節を支えきれなくなったんだって。それが大分酷いらしいんだ。骨が骨粗鬆症の状態で、軟骨は脆く削られてしまっているようなんだ。快適さのために栄養のある、よく噛んで食べるようなものを嫌い、美食中心の生活をしてきた結果のようだ。足を痛めてからは彼は車椅子での生活になったけど、その車椅子も自動化されていて、ボタン一つでソファにも移動できるし、ベッ

ドにも移動できる。入浴時も自分で身体を動かさなくても機械が自動的に姿勢を変えたりしてくれるし、服を脱いだり着たりする動作の補助をしてくれる。浴槽には浸からなくて、車椅子に座ったままシャワーを使うことができるんだ。ついこの前俺が見舞いに伺ったら、ほとんど寝たきり老人の生活をしていたよ。奥さんとは疾うに離婚しているんで、毎日介護さんに頼んで、食事の世話と掃除、洗濯をしてもらっているらしいんだけど、食事なんかは高級レストランの自動配達を利用しているようだ。俺はふと思ったな。彼は自分が退職後に寝たきり老人になる準備をしていたんじゃないかって。足があるのに足を使わない、手があるのに手を使わない。いろいろな装置を付けて、身体を動かさなくて生活していればいずれこうなることは目に見えている。哀れな話さ。広々とした家も今では移動の為の苦しみの原因になっている。これまでけちけち貯めてきたお金も介護の費用に消えてゆく。彼の場合は極端だけど、多くの人が同じような生活を求めて日々骨身を削っているって思うんだ」

亮子が言った。

「でも、この方は極端が過ぎたんじゃないかしら」

「うん、確かにそうかも知れないけど、俺たちだってすぐ近所にあるコンビニに行くのにも車を使うだろう。これは彼とあまり変わらないように思うんだ」

賢が言った。

「社会の仕組みがそれを助長してきているんだと思う。愚かな人間は安楽を追い求めて寝たきり老人になろうとしている。リゾートなんてほとんどこんな類さ。アメリカンドリームの行き過ぎの結果だな。日差しを受けた道ばたのオオバコの方がよほど美しいのに、部屋に造花を飾り、ライトアップをする。自分では美しいと思う。哀れなものさ」

祐子が言った。

「わたしは、そんなことはどうでもいいような気がするわ。寝たきり老人になりたい人はそうすればいいと思うの。わたしは人を愛して生きてゆければ、生活の形はどうでもいいような気がするのよ」

祐子は賢の方を見て微笑んだ。賢も祐子に微笑みを返して言った。

「確かに祐子の言う通りだ。だから、いろいろな障害物が無くなって、純粋に人を愛することができるような社会の基盤が必要だと思うんだ」
亮子が言った。

「賢さんが話すと、いつも難しくなるわね」

3人は声を上げて笑った。賢も釣られて笑った。

「今日、これから俺は原智明研究会の東京事務所に行ってみようと思うんだ」

賢の言葉に直ぐに祐子が反応した。

「わたくしも附いて行くわ」

祐子の言葉が終わるか終わらない内に数馬が言った。

「亮子さん、俺たちはVEAS館に行ってみようか？」

亮子は頷いた。四人は夕方ヘラクレスで合うことを再確認して分かれた。

ふたりきりになると、祐子は賢の左腕に自分の右手を絡ませて歩いた。

「夏の日に 君に寄り添い 行く道に 待ちわびし日の 来るか否かと」

祐子が独り言のように言った。賢は祐子の気持ちが痛いほど分かった。これほど自分と一緒に生きる事を望む祐子を愛おしいと思った。しかし、一方で生活の中に埋没してゆく意識を思うと、結婚に踏み切れることは躊躇された。ふたりが目黒の勾島の家に着いたのは午後二時を過ぎた頃だった。高級住宅が立ち並ぶ路地の一角の、古い石塀に囲まれた家が勾島の家だった。大きな煉瓦で作られた門柱の間に木戸の入り口が設けられていた。二人の背広姿の男性が何か話しながら木の門を潜り、背の低いほうの男が潜戸を後ろ手で閉めて出て行った。賢が門の柱に設けられているインターホンを押すと、女性の声で「どなた様ですか」という応答があった。賢が原智明研究会の話をする、「主人に聞いて参ります」という応答があり、少しして、「お待たせしました、鍵は掛かっておりませんのでどうぞお入りください」と案内があった。ふたりが潜戸を抜けると庭道に沿って植えられた楓の葉が垂れ下がり、林のように夏

の木陰を作り出していた。二十メートルほど奥に玄関があった。引き戸の前で賢は再び声を掛けた。44、5歳の鋭い眼光の痩せた男性が内側から引き戸を開けた。

「初めまして、わたくしは内観賢と申します」

「崎野祐子と申します」

ふたりが辞儀をすると

「原智明さんの研究に興味があるんですか？」

といきなり問い掛けられた。

「わたくしたちは、最近起きている失踪事件に附いて調べているんです。原智明さんが失踪されてから研究会が出来たと伺いましたもので、是非ご意見を伺いたいと思ひまして参りました」

賢がそう言うと、勾島は一步引いた話し方をした。

「我々は失踪事件そのものより、原智明さんの話した言葉について研究しているんです。だから失踪事件についてはあまりお役に立てないと思ひますけど」

木陰から吹いてくる風が涼しさを送り込んできた。祐子はハンカチを取り出して額に軽く当て汗を拭いた。賢が言った。

「実はわたくし自身も、一時的にこの空間から消滅したことがあるんです。どうも、自分が別の時空間に移動したような気がするものですから、原智明さんの話していた言葉の中にこの世界を構成する別の時空間に関する言葉が無いかと思ひまして、是非研究会に参加させて頂きたいと思ひまして」

「ほお、あなたも失踪したことがあるんですか。別の時空間ね。うん、それも可能性としては無視できないな。まあ、そういうことなら仲間に紹介しましょう。どうぞお上がりください」

ふたりは「失礼します」と言って家に上がった。勾島の家は古い造りで、玄関から突き当たりにある研究会の部屋までは長い廊下で繋がっていて、勾島の私室をその研究室に充当しているとのことだった。そこは母屋の端に新たに追加されたような出部屋になっていた。フローリングの十五畳ほどの広さの部屋で、隅に机が置かれている。3人掛けのソファ

一とシングルチェアが2つずつとセンターテーブルがあり、既に3人の男性がソファに腰掛けていた。

「皆さん、一寸紹介します。今日こちらを訪ねてこられた内観さんと・
・ ・ ・ ・」

「崎野と申します」

ふたりは自己紹介を含めて挨拶した。かなり年配の会社役員である大久保、40歳前後の内科医師山越、年配のサラリーマン弓張の三名で何れもふたりよりずっと人生経験を積んできている。勾島が3人のメンバーに向かって言った。

「鹿児島の原智明さんが失踪された件について、いろいろ取り沙汰されましたが、どうして失踪したのか、どのような経過を辿ったのかなどは未だに未解明のままなんです。ここにお見えになった内観さんは、原智明さんと同じように一時的ではありますが失踪したことがあるとのこと。わたくしたちの探求に何らかのヒントを与えてくれるかも知れません」

3人は頷きながら聞いていたが、最長老の大久保が賢に向かって言った。

「わたしどもは原智明さんの言葉に衝撃を受けて、ここにこうして集っているんだ。彼がいろいろな言葉を残しているんだが、その言葉が時として自分の存在を揺り動かすような内容を含んでいたり、中にはどうやら究極の真理じゃないかと思われるような内容を含んでいるものがあるんだな。彼の失踪が、彼の思考していた内容に関係しているのかどうかということにも興味がある。自分も「現在の経済のあり方はその根底がずれている。だからどこまで行っても満足できない。それは人間の意識にリンクしていないからだ」という彼の言葉を部下が話しているのを聞いて愕然としたんだ。今まではKM翁の「目的を達成するには、先ず思うことだ」とかDKの「思考の力」を信じて突き進んで来たが、初めがずれているからゴールに辿り着かないとは恐れ入った。なんとなくそんな気がしていても、これまで脇目もふらず頑張ってきた。おかげで、会社も1部上場したし、売り上げもここ十年で二十倍以上拡大した。し

かし、今は頑張った事への充足感しか残ってない。会社が発展しても喜びがない。原智明さんのこの言葉がそうじゃないって言うているように胸に突き刺さるんだ」

「まあ、掛けてください」

勾島がふたりをソファーに導いた。山越が口を開いた。

「わたしは内科の医師としていろいろな患者を診てきたんだが、確信を持って症状が改善できると思ったことは一度もない。こういう症状にはこの薬が合うとか、この薬はこんな副作用があるとか、そんな臨床試験の結果から生まれた薬を処方するだけだった。外科の医師も同じだ。悪いところを切除すればいい、影響が及んでいる部分はすべて切り取った方がいいなんて、やはり臨床実験とか施術経験から判断しているんだ。しかし、それをやってもどこまで治るか、改善できるかという事についての確信はこれっぽっちもない。病巣を取り除くことで人間の本来の機能の一部も同時に取り除いてしまっている。いつもそんな危惧に苛まれていた。そんなとき原智明さんの言葉に出会った。「医者は何と言おうが、既に病が治るか治らないかは決まっている。患者は治療とは別のプロセスで病を治している」これは自分にとっては衝撃だった。つまり、今の医者は本当の役に立っていないということを行っているんだ。普通、誰かがこんなことを言えば医師から猛反発を食らうんだが、原智明さんの言葉は、彼の友人が胃潰瘍で病院に懸かった時に友人に話した言葉のようなんだが、それを聞いた俺の友人の医師も不思議に反発を感じなかったようだ。最後の「患者は治療とは別のプロセスで治る」という言葉は青天の霹靂だったな。自分も薄々人間はどんな病も自分自身に治す力を持っているとは思っていたが、現代医学がそれを支えていると信じていた。しかし、原智明さんの言葉を聞いた途端、それが真実だと感じたんだ。どうしてそう感じたかは分からないが、多分現代医学からは異端児扱いされているオステオパシーやホメオパシーの治療法のことを知っていたからかも知れない。自分はそういう治療法の方が、西洋医学に対するほど違和感を覚えずにすんなり受け入れられた。西洋医学が臨床実験の積み重ねや局部治療で迷走しているのを見て、自分の内部に反発心

があったのだと思う」

話の切りのよいところを見計らって、先ほどから麦茶を載せた盆を手にして入り口に立っていた勾島の妻が賢と祐子の前にグラスを置いた。

「ありがとうございます」

ふたりは礼を言った。弓張が次は自分の番だと言わんばかりに身体を前に乗り出して話し始めた。

「僕はずっと技術開発関係の仕事をやってきましたんですが、このところ身体がだるく、疲れやすいんで病院で精密検査を受けたのです。そうしたら、GOTの値が普通の人の倍近くあり、GPTも高いということでどうやら肝臓の機能が低下しているようだと言われたんです。GOTだ、GPTだと言っても何のことだか分からないんですが、なんでも、担当医は肝臓に脂肪が溜まっていて脂肪肝になっているって、下手をすると肝硬変になっちゃうって言うんです。肝硬変になると肝臓癌になって死ぬ可能性が高いらしいんです。過去に会社の仲間が肝臓を壊して死んでいるのでとても恐ろしくて、精密検査の結果が出てからは碌に眠れないんです。人は死ねば全てが無くなると教えられて生きてきましたから、生きている間に人生を謳歌したいと考えているんですが、どうやらそれも叶わなくなりそうで、毎日が暗くじめじめした感じになってきていたんです。そんな気分を一掃しようと思い、指宿に旅行に出たのです。その時、原智明さんの言葉に出会ったのです。彼が「人間の命は永遠で、生とか死とかは一つの過程に過ぎない。誰にでも分かるように永遠の命が証明できる」と言っているという話を聞いたんです。指宿の温泉でした。宿泊客が大広間に会して夕食を摂っているとき、隣のテーブルの親睦会の連中が大きな声で話しているのを聞いたんです。原智明さんの話を中心でしたけど、「本当に死んでも命はあるのかな」なんて言っていました。連中、誰も原智明さんの言葉を信用していないようでしたが、僕は急に背中を押されたように強い衝撃を受けました。でも、まだそれが本当のことなのかどうなのか確信が持てませんので、こうして研究会に参加させて頂いているのです」

勾島が自分も話さなければと思ったようで、一人掛けのソファから少

し身を乗り出して話し始めた。

「実は、わたくしの場合は原智明さんの勤めていた会社の研究所の社外指導教官を仰せつかっていて、月に二回この会社の東京の本社で、現在開発中の機器について学術的な見地から意見を申し上げているのだが、原智明さんが失踪する丁度二か月前の定例会の時、彼も指導会に出席したんだ。この会社は光学機器を設計製造している会社なんだけど、光の分光装置についての議論の中で、原智明さんが、他の人と異なった意見を言ったんだ。光の分光はスプリッターというプリズムで行うのだが、彼は「光は実空間を通る経路と虚空間を通る経路がある。虚空間を通った光は干渉なんかのエネルギー変化の時に実空間に現れる」と言うんだ。こんな理論は初めてだったからビックリしたんだ。量子科学の世界で電子の不可思議な挙動を研究している立場から、ここに波動方程式を理解する切り口があると思ったんだ。原智明さんは何かとてつもない思考能力を持っているような気がする。だから鹿児島で研究会ができたと聞いて早速東京に事務所を構えることにしたんだ」

そう言うと、勾島は両肩を少し持ち上げて、「さて」と言った。

「君たちの話を聞かしてくれないかな」

賢は勾島の方を向いて「はい」と応えてから、大久保、山越、弓張と視線を廻し、再び勾島の方に向き直って話し始めた。

「わたくしたちの原智明さんへのアプローチは、皆様方と少し違います。と言うのは、わたくしたちは特に原さんの話した言葉や行った行為に関心を持って、もっと詳しく原さんのことを知りたいと思っている訳ではありません。実はわたくしと、わたくしたちの友人の藤代亜希子さんに起きた一時的な消滅現象に端を発しているのです。最近起きている失踪事件の形が何となく自分たちの一時的な消滅現象と同類じゃないかと考え、調査を始めたのです。これまでに天城の浄蓮の滝で消息を絶った早瀬由美さん、花巻の自宅前から自動車に乗って失踪した野岸孝子さん、大山のバスの転落事故の時に消滅した江川勝児さんについて調べました。わたくしたちは人間の存在と意識の関わりという観点から調査を進めています。今のところ、消滅時にはなんらかの外的な意識力が作用

したとしか思えないのです。まだはっきりしたことは申し上げられませんが。原さんが失踪したときの状況についても、いずれ調査したいと思っています」

勾島が言った。

「君たちが失踪したときのことを少し話してくれますか？」

「はい。わたくしがこの崎野と共にファミリーレストランで食事をしていたとき、少し気分がすっきりしなくなりました。手洗い所に行って顔を洗おうとしたのですが、シンクの前で、自分としてはほんの一瞬なんですが、意識が朦朧としたのです。はっと我に返って顔を洗い、自分の席に戻ったらおよそ3時間が経過していたのです。その間、一緒にいた仲間がわたくしを捜し廻ってくれたのですがどこにも見当たらなかったようです」

そう言いながら賢は同意を求めるように祐子を見た。祐子は相槌を打った。

「確かに3時間の間、内観さんは消えました」

大久保が「うーむ」と唸った。賢は亜希子については敢えて口にできなかった。大久保が

「ところで、原智明さんが失踪したことと、彼の話していることが超現実的だということは何か関係があるのだろうか？」

と誰に向かってというでもなくボソボソと言った。弓張が

「彼の頭の中には我々とは異なった時空間の概念があったように思います。僕が感銘を受けた生命についての概念もそれと関係しているように思います」

と言った。賢はそれに呼応するように

「わたくしも、又聞きなんですが、原智明さんの「愛を持って、死を成就できれば、一応生きた証になる」という言葉に何か深い意味があるように感じています。思考が感情や意識と強く結びついた状態を謂っているように思います。わたくしの経験からすると人の消滅は思考に基づいた意識の作用で起こるように思えるのです」

と賛同した。弓張は

「意識とはどういうことですか」

と聞いた。賢は

「わたくしが考える意識とは、自分が受動的に反応するのではなくて、主体的に認識力を働かせることだと思います。自分として息付く事だと思います」

と応えた。弓張は「うーむ」と再び唸った。勾島が

「量子科学という立場からも、意識と存在との関係が重要視されてきているんです」

と言ってから少し経って、

「意識は思考とは切り離して考えるべきものだと思います」

と付け加えた。

賢と祐子はビアガーデン・ヘラクレスに着いた。6時半少し前だった。既に三つのテーブルで酒宴が始まっている。賢達の仲間はまだ誰も来ていなかった。屋上の欄干に程近い大きめのテーブルに席を取りながら祐子が言った。

「賢くん、次はどこに行くの？」

「鹿児島に行って原智明さんのことをもっと調べようと思っているんだけど、その前に彼の語録を少し研究してみたいんだ」

賢は帰り掛けに勾島が特別と言ってコピーしてくれた研究会の原智明語録と題された一覧表を取り出して祐子に見せた。全部で30番まであったが、勾島によるとまだこれからも出てくるだろうとのことだった。これは人から人に言い伝えられた言葉だけを収録したものとのことだった。これ以外に原智明がパソコンのファイルとして持っている資料や日記などがあるようだと言っていた。一覧表には原が話した言葉と、それを聞いて感銘を受けた人の名前、職業、住所、電話番号が書かれていて、その時に感じた感想が2～3行で表現されていた。先ほどの4人から説明のあった言葉も23番～26番に書かれていた。祐子は興味深そうにそれを眺めていたが、そこに祐子が鹿児島から聞いた言葉の内の一つが書かれていた。それは「宇宙には無数の複留がある」

という言葉だった。その言葉に感銘を受けたのは米国の数学者だと書いてある。名前や個人情報を書いてなかったが、その時の感想が「この宇宙には複素関数の留数に相当する窓が無数に存在すると言っている様に解釈できる」というものだった。

「賢くん、ほらここに、この間話した言葉が載っているわ」

祐子は嬉しそうに言った。賢が

「彼の言う複留ってのは人間の意識のことじゃないかな」

と応えると、祐子は首をかしげて微笑んだ。ビヤガーデンのボーイがやって来た。

「チケットを買って来てください」

賢が入り口の横にある発券機で5人分の生ビールとつまみの券を購入して席に戻ろうとした時、エレベータから3人のOLの後に続いて数馬と亮子が降りて来た。

「おう賢、早いな。祐子さんも来ているのか？」

「うん、さっき一緒に来たところだよ。あの右側の隅の席だ。生ビールと枝豆、ソーセージ、フレンチフライのチケットを買ったけど、他に何か注文はあるか？」

「取りあえずはそれでOKだ、ねっ、亮子さん」

数馬は断定した後、まるで恋人に対するように亮子に同意を求めた。

「ええ、いいと思うわ」

亮子は微笑んだ。一寸照れているようで、愛らしかった。3人がテーブルに着くとボーイがやって来た。

「全部用意してもよろしいですか？」

「あと5分待ってください、友達が来るので」

賢は時計を見て言った。祐子が

「亜希子さん、忙しいのに時間通りに来れるかしら？」

と言うと、賢は

「もう今、エレベータで上がって来ているよ」

と言った。祐子は「えっ」と言って、数馬や亮子と顔を見合わせた。賢が言った通り、少しして亜希子が入り口に入って来た。賢は微笑んだが、

他の3人の間に一瞬不可解といった雰囲気があった。祐子が聞いた。

「どうして分かったの？」

「説明できないけど、分かった」

賢の返事に祐子は少々不機嫌そうな感じになった。

「みなさん、お待たせして済みませんでした」

「俺たちも今来たばかりさ」

数馬が言った。賢がビール券をボーイに渡すと、間もなくボーイが一度に大ジョッキ2つと中ジョッキ3つを持って来た。

「今日はわたくしが奢りますから、みなさん思い切り呑んでください」

亜希子が珍しくらしくないことを言った。4人がめいめい「ごちそうさま」と言うと、数馬が全員にジョッキを手にするのを促してから力強く発声した。

「亜希子さんの引っ越しの完了と、我々の近所に来たことを歓迎して乾杯！」

「乾杯！」

夏も漸く激しい暑さの峠を越え、夕暮れには爽やかな風が、昼間に蓄熱した身体を外側から冷やしてくれる。皆気分が爽快になってきた。数馬と賢は大ジョッキをぐいぐい傾け、半分ほどを呑んでフーッと息を吐いた。ふたりの呑み方がそっくりだったので3人の女性はくすくす笑った。祐子と亮子は一口飲んでからジョッキを置いた。亜希子は少し唇を濡らしただけだった。賢が亜希子に向かって言った。

「全部終わったのか？」

「はい、おかげさまですっかり片付きました。生活が落ち着いたら、皆さんにも是非いらして頂きたいと思います」

「どんな部屋なの？」

亮子が聞いた。

「寝室と居間と台所、あとはバスと洗面所があります」

「広いのね、羨ましいわ」

亮子は儀礼的に微笑みながら言った。

「あの辺りには他に空き部屋が見つからなくて、仕方なくあそこに決め

ました」

祐子は「金持ちなんだな。わたくしとは対照的だ」と思った。祐子は生まれて間もなく両親を亡くし叔父の家で育った。大学まで通わせてもらったが、就職してからは一人暮らしをしている。生活費もすべて自分の給料で賄っている。そのため贅沢はできないのだが、比較的きれいなアパートに住むことが出来た。貯金も僅かずつだが積み立てていて、自分の今の生き方に満足している。そんな自分と亜希子の境遇は大きく異なっていると思った。空をピンク色に染めて、夕日が遠くの森の木々の中に落ちてゆく。

「亜希子さん、お父さんは何処の会社に勤めているの？」

亮子が訊いた。

「はい、東領製作所です」

「お父さん、偉いんですよ」

「はい、社長です」

亜希子は屈託無く応えた。その応答は淡々として、違和感を感じさせなかった。祐子が言った。

「すごいわね。亜希子さん、アルバイトしたとき叱られたんじゃない？」

「はい、両親は絶対反対だったんですが、わたくしが社会勉強だと何度も説明して、やっと許してもらいました」

賢は亜希子の父親に会った時のことを思い出した。その時は社長だとは思わなかったが、威厳の深さから多分重役だろうとは推察していた。だから社長と聞いてもあまり驚きもしなかった。数馬は別の反応を示した。

「俺の会社はSHTシステムだけど、亜希子さんの東領製作所とも取引があるんだ。そういう意味じゃ多少関係があるってことかな。もっとも会社の規模じゃ提灯と釣り鐘の差があるけどな。今度東領製作所じゃあ新規事業ということで、半導体の製造装置を手掛けることになったようだけど、その制御部の設計開発でいまRFP（リクエスト・フォー・プロポーザル）を受け取っているんだ。東領製作所の新規事業に何とか参画したいので、社内じゃあ今必死になって提案書を作成しているところ

さ。だけど、最近の他社の提案書は口先だけのものが多いから、見た目で負けないようにその点も検討中なんだ。亜希子さんのお父さんは社長だから直接具体的な入札なんかには関与しないだろうけどね」
数馬はそう言いながら大ジョッキを一気に飲み干して、ふーっと息を吐いた。

「わたくし、父の会社のことは全く分かりません。父が会社経営でどんな考え方をするのかも知りません」

「それはそうだよ。会社経営と家庭での生活はほとんど別次元だから」
賢が補うと、数馬が愉快そうに言った。

「はっはっは、それはそうさ。だけど亜希子さんが東領製作所の社長のお嬢さんだと聞いただけで楽しくなってきちゃったんだ」

「はっはっは、お前は仕事一途だからな。何となく分かるよ」
男達の哄笑を聞いて3人の女性は顔を見合わせた。賢が

「俺も暫く失踪事件を調べたら、また第一線に戻るつもりだ」
と言うと、祐子が空かさず、

「そうよ、それがいいわ」

と言った。亮子も

「そうね、やっぱり男の人はバリバリ仕事をしているのが頼もしいわ」
と言いながら少し数馬の方を伺ってから、割り箸を持ってソーセージを一つ掴み、片端を口に入れてかりりと噛んだ。その音があまりに軽快だったので祐子と亜希子も割り箸を手にした。亜希子は祐子がソーセージを噛んでかりりと音を立てるのを待って、小さめのソーセージを摘んで口に入れた。しかし噛んだ時の音はほとんど聞こえなかった。今度は男達が顔を見合わせて微笑した。「ここ一月ばかりの間にいろいろなことがあった」という思いが賢を捉えた。一番大きなことは祐子との関係だ。普通だったら結婚する段階にまできている。祐子をこのままにしてはおけないと思った。そして亜希子のことも自分の生き方を変える程の再会だった。これから亜希子とどのように向き合っただけがいいのか具体的なイメージが掴めなかった。一方で亜希子の意識が自分の意識に繋がっていることを強く感じていた。賢は祐子の言葉で我に返った。

「どうしたの？もう酔っちゃったの？」

祐子は半分冗談のように言った。賢は亜希子が自分をじっと見つめているのに気付いていたが、祐子の方を向いて言った。

「一寸この1ヶ月ほどの自分の身辺の変化を思い出していたんだ。いろいろなことがあったなって」

「本当ね。賢くん、違う世界に入ってゆこうとしているみたい」

祐子のその不安げな言葉を、賢は確かにそうだと感じた。今までの生き方と違う生き方を探している自分が見えるような気がした。

「今日、亮子さんとVEAS館に行って来たんだ。あそこは凄いところだな。よくあそこまで調査してあるなって感心したよ」

数馬が言った。

「何を体験したんだ？」

「俺はライオンを体験したかったんだけど、亮子さんが花の体験をしたって言うから、桜の花の開花からサクランボが出来るまでを、俺が雄蕊、亮子さんが雌蕊で体験したんだ。すごいな、まるで自分が本当に桜の花になった気がしてくる。最後は圧巻だったな。自分の命をサクランボに宿す過程は見事だ。何か俺と亮子さんが一体になったような錯覚を起こすんだな」

亮子の顔が赤くなったが、既にアルコールが少し廻ってピンク色になっている顔色の微妙な変化には誰も気付く筈もなかった。

「それは俺と亜希子さんが体験したのと全く同じだな。な、亜希子さん」賢が亜希子に言った。亜希子は「はい」と言い、少し恥ずかしげに下を向いた。祐子は頭が熱湯で一杯になった感じがしてきて、中ジョッキのビールを一気に飲み干した。

「おい、祐子、大丈夫か？そんな飲み方をして」

賢の心配そうな言葉に、祐子は「大丈夫よ」と言って中空を見詰めた。祐子だけが桜の花の体験をしていない。賢と数馬は祐子が拗ねているんだと思った。数馬が「一体になったような錯覚を起こす」といった言葉が特に祐子を落胆させた。

「祐子、明日、もう一度VEASに行って今度は桜の体験をしよう」

賢の一言で祐子は気を取り直した。

「うん」

祐子の目が少し潤んだ。賢は祐子の子供のようなあどけなさに言いようのない愛おしさを覚えた。他の3人も祐子の嫉妬に気付いて、気取られないように意識しながら微笑んだ。亜希子がビールと唐揚げ、チーズスライスのチケットを買いにゆき、チケットをボーイに渡してから席に戻った。

「これ、さっきの分です」

亜希子が賢に金を渡した。賢は礼を言ってそれを受け取り無造作にポケットに押し込んだ。

翌日、賢と祐子はV E A S館の入り口に居た。祐子は賢の左腕を抱え込んでいる。

「この前、桜の花にすればよかったわ」

「いいじゃないか。お前と一緒になら何度ここに来てもいいよ」

その一言に祐子は賢に抱きついた。賢は祐子をそっと引き離してから、チケットを買った。祐子と共に体験する受粉のプロセスは亜希子と一緒にした桜の花の体験より、一層強い衝動を与えた。まるでふたりがベッドで一体になったときと同じような感覚だった。祐子は幸せを感じた。V E A S館での体験がこんな形になるのは、ふたりが既に意識の一体化を経験している為だと思われた。V E A S館を出ると祐子が訊いた。

「亜希子さんの時もこんな体験になったの？」

「いや、おまえと一緒にだからだ。前にも言ったように、俺たちはもう分離していない」

祐子が嬉しそうに賢の左手に腕を絡めた。

ふたりは区立図書館に着いた。原智明語録の感想をまとめることにしていた。賢は館内に入ると一つのテーブルを確保してから、用意して来た早瀬由美から預かったノートと、失踪事件調査ノート、そしてもう一冊新しいノートを鞆の中から取り出してテーブルの上に置いた。新しいノートの表紙には「原智明語録」と記入した。その第1ページ目にはN o .

1と記載されていて、タイトルが「愛を持って、死を成就できれば、一応生きた証になる」となっていた。これは賢がそこに深い意味を含んでいると感じた原智明の言葉だった。賢は祐子に、勾島から貰った原智明語録のコピーを開いて見せた。祐子はV E A S館で桜の花の体験をして以来、全身が喜びで満ちていた。賢の動きを見るとそれだけで感動して涙が浮かんだ。祐子はその語録を一瞥した。賢は祐子の耳の側で、

「今の俺とお前だ」

と言った。祐子には賢の言った言葉の意味が分からなかったが、「愛し合っているということだ」と解釈して微笑んだ。ここには鹿児島島のキリスト教教会の牧師の名前と属性が書かれていて、呼応欄に「主はすべての人を慈しみたまう。主に召されるまで、主を愛し続けなくてはならない」と書いてあった。賢は牧師が語録の意味を誤解していると思ったが、原智明語録ノートのNo. 1の呼応者の情報を「共鳴者」と銘打って、そこに牧師の名前と属性を書いた。この牧師は47歳の男性だった。そしてその下に「呼応欄」と記入し、牧師の感想を書き込んだ。更に1行空けてまた「共鳴者」と書き込み、「祐子」「賢」と書き、ふたりの属性を記入して「感想欄」と書いたとき、祐子が賢からペンを取り上げて、そこに「祐子：わたくしはあなたを愛しています。わたくしは幸せです。いつ死んでもかまいません」と書き込むと、ペンを賢に返した。賢はその次の行に「賢：俺もお前を愛している。今死んでもいい」と書き、続けて、「総ての存在に対して祐子に対するのと同じ心をもって死んでゆけたら本望だ」と書き込んだ。賢は祐子の耳元に、ほとんど聞き取れないような小さな声で

「愛しているよ」

と言った。祐子もほとんど聞こえないほどの声で、

「愛しているわ」

と応えた。賢は原智明語録ノートの2ページ目から順次、勾島にもらったリストの内容を確認しながら書き写していった。内容は次の通りだった。

- №. 1 「愛を持って、死を成就できれば、一応生きた証になる」呼応者：牧師
- №. 2 「人間は人間を作る動物だ」呼応者：神学校講師
- №. 3 「ごくみを大切にしないでだめだ」呼応者：小学2年生
- №. 4 「想念は形式を持って初めて力が出る。だから形が大切なんだ」
- №. 5 「宇宙は自己共振で誕生した。だから、宇宙は自分と同じものだ。自分が消えれば宇宙も消える」
- №. 6 「年を取ると時間の流れが速くなったように感じる。それは肉体に縛られているからだ。元々時間の流れなどは無い」呼応者：老婦人
- №. 7 「無限大と無限小は同じものだ。無限遠点から素粒子までを見てみれば分かる」
- №. 8 「宇宙には無数の複留がある」呼応者：大学教授（米国数学者）
- №. 9 「物質的なものも精神的なものも総て基底振動数で振動している」
- №. 10 「宇宙の構造を理解する為には、エネルギーの流れを理解しなくてはならない。それも、表層世界のエネルギーだけではだめだ」
- №. 11 「自我の呪縛を取り除けば、無限の世界が現れる」呼応者：仏教僧侶
- №. 12 「内側を探すと外側が総て現れる。それが自分だ。総てが自分自身だ」
- №. 13 「今の社会の仕組みは本来の逆だ」呼応者：参議院議員（社共党）
- №. 14 「個としての自我はこの現象世界にのみ存在する」
- №. 15 「人間はこの世界の3%程度しか理解していない。内側を理解していないから、ほとんど分かっていない」
- №. 16 「自然界が黄金律で形作られていることは明白だが、人間の作ったものは黄金律にはなり得ない。そこには見えない意図がある」
- №. 17 「あらゆる選択肢が与えられている。自分の選択した通りの生になる」呼応者：大学受験生
- №. 18 「この世で自分に起きてくることは、自分が呼び寄せている

ことだ。偶然に起きることは無い。肯定的あるいは否定的意識であることに執着すると、それが、あるタイミングで顕現する」

№． 19 「知識はいらない。返って邪魔になる。耳を澄ませば何でも聞こえて来る」

№． 20 「確実な認識ができると、存在が確定する。エーテルに意志と感覚的認識が融合して働けば形態が現れる。思考はその調整役を果たす」

№． 21 「この世界は複素空間で出来ている。実は虚の像、虚は実の像だ」

№． 22 「物質と空間との間に境目は無い。振動が異なるだけだ」

№． 23 「光は実空間の経路と、虚空間の経路の両方の経路を通る。虚空間を通った光は干渉なんかのエネルギー変化の時に実空間に現れる」 呼応者：大学助教授（天文学）

№． 24 「現在の経済のあり方はその根底がずれている。だから何処まで行っても満足できない。それは人間の意識にリンクしていないからだ」 呼応者：会社役員

№． 25 「医者が何と言おうが、既に病が治るか、治らないかは決まっている。患者は医師の治療とは別のプロセスで病を治している」 呼応者：医師（内科医）

№． 26 「人間の命は普遍で、生とか死とかは一つの過程に過ぎない。誰にでも分かるように永遠の命が証明できる」 呼応者：サラリーマン（技術系）

№． 27 「人の出生のプロセスは、宇宙誕生のプロセス、生命誕生のプロセス、太陽の燃えるプロセスと同じだ。何も異ならない」

№． 28 「形を作らなければ何の作用も起こさないが、一旦形を作ると直ぐに形に捕らわれてしまうから始末が悪い。形を持ってことを実現できたら直ぐにその形を捨てなくては駄目だ」

№． 29 「未来だけでなく、過去も全て現在の自分が作り出している虚構だ」

№． 30 「この世は完璧なまでの写像だ」：作家

原智明の全ての言葉をノートに書き写し終えると、賢は早瀬由美から預かったノートを取り出した。初めの詩の次のページは「この世の真理」と題されたページで、そこにはただ1節の言葉が書かれている。

「大きな波と無数のさざ波がわたしを覆い、わたしはわたしになる。波は美しい。やがて凧、波は静まり、水面は鏡面になって久しくあり、また彼方の形を映し出す」

抽象的な言葉だった。しかし、どこか原智明の言葉に響きが似ている。原智明の言葉のNo. 30と関係があるのではないかと賢は思ったが、早瀬由美が禁じた通りそれを口には出さなかった。

「このノートの文章と原智明語録と何か関係があるの？」

祐子が聞いた。賢は

「まだ、わからない」

とだけ応えて、次のページを開いた。そこには

「彼方と思えばすぐ此方、いつも、現れ、消える。巡り巡る。消えたくない訳じゃないが、教えてもらったように、くろがねの枷かせを付ける。すると、もう二度と消えることはなくなる」

祐子が

「この消えるっていうのは、あなたや亜希子さんが消えるようなことを謂っているのかしら？」

「……」

「消えたり、現れたり、この文章はなんかあなたのことを謂っているようだよ」

「そうだな。でも今ひとつ意味が分からない」

賢は次のページを繰った。

「美しいと感じなくちゃだめ、楽しいと感じなくちゃだめ、幸せと感じなくちゃだめ、嬉しくなくちゃだめよ。だって生まれたんだもの」

祐子が

「なんか分かるような気がするな。人生有意義に生きなくちゃ駄目だって謂っているのよね」

「いやもっと単純だ。いつも感動して生きろって言っているんだと思う」

「・・・・・・・・」

「祐子、この間、海の老人の言葉を話したかな？」

「ええ、聞いたわ。だけどよく分からなかった」

「原智明語録の中にあるNo. 21の「この世界は複素空間で出来ている。実は虚の像、虚は実の像だ」という言葉は海の老人の「現実的には俺たちは異なった次元に入っているんだけど、そのことに気付いていない。実際は実在的部分と虚在的部分で成り立っている。この虚の部分が現在の科学では解っていない」という言葉は同じことを謂っているように思えるんだ。前にも言ったけど、これが現在の物質社会の行き詰まりを解決する道案内になる様に思う。もっと具体化できればいいけど」
「あなた、わたしは難しいことは分からないわ。でも、あなたに附いて行くわ」

祐子は小さい声で囁いた。ふたりは区立図書館を出た。図書館に入るときは晴れていたが、外は土砂降りになっていた。ふたりは暫く入り口の軒下に佇んでいたが、小降りになったのを観て雨の中に駆け出した。図書館に来る途中にコンビニエンスストアがあったのを覚えていた。しかしふたりが店に駆け込んだ時には全身ずぶ濡れになっていた。ふたりとも水に濡れて身体の線がくっきり見える。賢はポケットからびしょぬれのハンカチを出してきつく絞り、祐子に渡した。祐子は顔と髪の毛を拭いた。賢はそのハンカチを取ると再び絞って祐子に渡した。そんなことを5、6回繰り返すと、祐子の身体の線は分からなくなった。賢は自分のセカンドバッグからノートを取り出してみた。幸い濡れていなかった。賢は濡れたハンカチを絞ると自分も顔と手足を拭いた。それから傘を2本取りレジに持ってゆこうとした。

「一本でいいわ」

外はまだ雨が降り頻^ふっている。

「濡れるぞ」

「もう濡れてるわ。気持ちがいいほどに」

1本の傘にふたりで入った。賢は祐子の肩を抱き寄せて歩いた。雨の激

しきは弱まらなかった。地下鉄の駅の構内に入ったときには、コンクリートの床は流れ込んだ水で濡れていた。周りには賢と祐子以外にびしょ濡れになった者はいないようだった。電車の中で何人かの男が祐子の方をちらちらと見ていたが、祐子は気にも止めなかった。アパートに着くと祐子は賢に部屋に入るよう促した。夕方の4時半を回ったところだった。ふたりが目を覚めたのは夜の10時20分頃だった。目覚めたとき祐子は裸の身体を丸めるようにして賢の胸に頭を埋めていた。祐子は身体を起こして賢から離れた。賢に再び興奮が戻ってきた。

ふたりは空腹を感じていた。祐子が上気したピンク色の頬を賢の頬に押しつけて耳元で、

「あなた、お腹がすいたでしょう？」

と言った。賢は右手で祐子を抱き寄せながら「うん」と言った。

祐子が即興で作ったスパゲティは賢を満足させた。

「原智明語録も一通り頭に入ったし、天城で預かったノートとの突き合わせもできたから、今度は鹿児島に行って直接原智明を調べてみたいんだ」

「いつ出掛けるの？」

「うん、明日飛行機の予約をしようと思う。できたら明日の午後の便、駄目でも2、3日中には出掛けたい」

「随分性急ね」

「なぜか、早く失踪事件の原因を究明しなくてはならないような気がするんだ」

「私も一緒に行きたい」

「……………」

「でも、無理。この間休んでしまったでしょう、暫くは休めないわ。あなたがいないうち、わたしどうしよう」

「数馬に話しておくよ。何かあったら頼んだらいい。亮子さんもいるじゃないか」

「……………一緒にいたい」

翌日、祐子が仕事に出掛けてから賢は祐子のアパートに鍵を掛けて出

た。自分のアパートに戻ると、ゆきからの手紙が届いていた。最近はまだ、日曜日でも郵便物の配達をする運用に戻ったのかと思いながら封を切った。

「拝啓 内観賢様へ

お元気ですか？私たちは元気にしています。金曜日に保険会社から保険金を振り込んだとの連絡がありました。昨日銀行に行ってATMで確認したら350万円も振り込まれていました。私たち助かりました。賢さんにはなんとお礼を言っていかが分かりません。本当にありがとうございました。賢さんの優しさを思うと涙が流れます。太郎や信次も賢さんに会いたいと言っています。一度東京見物を兼ねてお礼に伺いたいと思います。そのことを言ったら、太郎や信次は飛び跳ねて喜び、おくないさまに手を合わせてお礼を言っていました。賢さんの都合のよい時を教えてください。私たちはお正月までにはと考えています。

ゆきより」

別に太郎、信次からの短信が付いていた。

「けんおにいさん、このあいだはありがとうございました。とても楽しかったです。いつもよせぎパズルであそんでいます。また来てください。

太郎より」

「けんおにいさん、おみやげありがとうございました。けんおにいさんだいすきです。

しんじより」

小父さんでなくおにいさんと言っていると思って賢は微笑んだ。早速返信を書いた。

「拝復

ゆきさん、お便りありがとう。ゆきさんと太郎くん、信次くんが元気でいてくれるのを知ってとても嬉しく思います。また、保険金が降りたと聞いて胸を撫で下ろしています。でも、お父さん、お母さんがいない毎日、ゆきさんが太郎君や信次君の面倒をみて頑張っていると思うと、一日も早くお母さんの失踪の原因を見付け、あなた達の許に戻って来られるようにしてあげたいと思って、ぼくも一生懸命調査を続けています。あなた達が東京に見えたら、どこか楽しいところに行きましょう。

土曜日に来て、その日は東京見物・・・これは行きたいところを考えてください。それから一寸狭いですけど僕のアパートに一泊して、次の日に東京ディズニーランドに行って、そこから直接遠野に戻る。一寸強行ですけど、そんなコースでどうですか？ぼくは、鹿児島にあなた方のお母さんと同じように失踪してしまった人がいますので、来週その人のことを調べに出掛けます。その間、僕と連絡が取れないときは崎野祐子さんに連絡を取ってください。彼女に話しておきます。では、お返事を楽しみにしています。

内観賢より」

賢は祐子の住所とスマホの電話番号をメモに書いて同封し、太郎と信次にも別々に1通ずつの返信を書いて3通の封書を作った。3人がそれぞれ自分宛の手紙をもらって喜ぶ顔が目についた。賢は飛行機の予約をした。午後の便に空席があった。予約を入れた後、祐子に連絡しようと思ったが、手元にパソコンが無い。数馬はまだ仕事から戻っていない。先ず亜希子のスマホに電話をした。昨日亜希子が引っ越して来たマンションは賢のアパートのすぐ近くにあったが、セキュリティでガードされているため近寄り難い感じを与える。亜希子は賢からの連絡を待っていたように電話口に出た。賢が「祐子や数馬は仕事なので、伝えて欲しい」と言うと、自分の部屋でメールした方がいいから直ぐに来るようにと言った。賢は一旦は遠慮したが、亜希子が是非と言うので一寸亜希子の部屋を見てみたいという好奇心が沸いてきた。亜希子はセキュリティゲートの通り方を細かく説明した。亜希子のマンションの部屋は住居の最上階、17階にあった。入り口を入ると3メートルほどアプローチがあり、その先に広々としたリビングルームが広がっていた。突き当たりの窓からは近くの隅田川が望める。河口から入り江に渡るコンクリートで造形された水域が手に取るように分かった。普段見慣れた川岸も、この高さから見ると全く別の場所を見ているような錯覚に陥る。賢達のアパートは窓の右端に見えた。2階建てだが全く高さを感じない。その周りは住宅で埋め尽くされている。所々にとてつもなく高い高層ビルが建っている。いつも行っているファミリーレストランは背の高いビルの陰に隠れ

て所在を確認することもできないが、周辺の建物はほとんどこの部屋より下に見え、その屋根や雨晒しの屋上の姿を曝け出していた。リビングルームにはダイニングキッチンが付いていて、ダイニングテーブルとキッチンとが棚で仕切られている。反対側は洗面所になっているようだが、リビングルームからは見えない造りになっている。収納棚の横にある大きめのドアの奥が寝室になっているのだろうと思われた。部屋の窓寄りに応接セットがあり、ガラス張りのテーブルの周りに3人掛けのソファ2脚がコーナー用のソファで繋がれた配置で置かれている。独身女性が一人で生活するには広すぎる程だった。亜希子は賢をソファに案内した。前掛けを掛けてまるで主婦のような感じを与えた。賢は窓から見える川岸を眺めて、初めて祐子と出会ったときのことを思い出していた。亜希子が麦茶のグラスを2つ持って来てテーブルの上に置くと、賢の方に視線を向けて言った。

「昨日はありがとうございました。とても楽しい1日でした」

「こちらこそ御馳走様。お酒、大丈夫だった？」

「はい、お酒はほとんど頂きませんでしたので」

亜希子は清々しい顔をしていた。何かが吹っ切れたような感じがあった。

「実は今日の午後、原智明さんの調査の為に鹿児島に出掛けるんだ。それで皆に連絡しようと思ったんだけど、今仕事中だろう。だから君に伝言してもらおうと思ってね。さっきも言ったけど俺はパソコンも持ってないんだ。こんな時はちょっと不便だな」

亜希子のラップトップパソコンはリビングルームの隅にあるデスクの上に置いてあって既にネットワークの接続も終わっていた。

「わたくしのパソコンでメールしてください」

亜希子がパソコンの電源を入れた。

「わたくしのメールアカウントから発信してもいいですけど、祐子さんが何と言われるか・・・」

「うん、ありがとう。ホットメールを使うよ」

賢は自分のIDで祐子と数馬にメールを送った。「宿はまだ決まってい

ないので、分かり次第連絡する」と書いた。祐子充てのメールにはそれに加え、ゆきとの連絡について「留守の間よろしく頼む」と書いた。書き終わると、立ち上がりながら亜希子に言った。

「これから帰って支度をするよ」

亜希子は賢の目を見つめながら言った。

「わたくしも一緒に連れて行ってくださいますか？」

「引っ越したばかりで両親が心配しないか」

「大丈夫です」

亜希子はきっぱりと言い切った。賢は祐子のことが気掛かりだったが、亜希子の哀願するような眼差しに「やむを得ない」という思いが湧いてきて、両親の承諾を取ることとを条件に了解した。亜希子は嬉しそうな顔をして、寝室のドアを開けると弾むような足取りで部屋の中に入って行き、スマホを手にして戻って来た。すぐに航空機の手配をするつもりのようにだった。賢は自分の乗るフライトの番号を教えた。亜希子が航空会社に電話するとまだ空席があった。亜希子は賢と隣の席になるように申し込んだ。手際がよかった。午後4時の便だった。

「それじゃあ1時頃にここを出よう。途中で食事を摂ればいいな。今9時少し前だから、あと4時間しかない。大丈夫か？」

「はい、わたくしは大丈夫です。いつでも賢さんに附いて行けるように準備してあります」

「ご両親に連絡して了解を取らなきゃだめだよ」

賢はもう一度念を押してから亜希子の部屋を出た。祐子は部長からの指示で客先に書類を届けるために外出していたが、そのまま外で食事を済ませ、12時15分ころ自分の席に戻りパソコンのメールを確認してビックリした。「もう、賢が出掛けるまでに時間が無い」と思った。祐子は事務所を出て人影の無いところで賢に電話した。

「あなた、いつのフライト？」

「祐子か、午後4時だ。もう少ししたら出るよ」

「いつ戻るの？」

「多分、1週間ぐらい向こうに居ると思う。原智明さんの研究会の人た

ちに会ってみようと思うんだ。あそこにはいろいろな情報があるように思うからな。まだ宿が決まってないから、決まったら連絡するよ。あっ、そうだ。亜希子さんも一緒に行くことになったよ」

「・・・・・・・・」

祐子は黙り込んだ。

「もしもし祐子、ゆきさんから連絡があったら頼むな。この間も言ったように、一度東京見物に来る予定だから、その計画の相談に乗ってやって欲しいんだ」

「・・うっ、うん、わかったわ」

祐子の声に力がない。

「祐子、大丈夫だよ。調査の旅行だから、心配するな」

「あなたを信じてはいるけど、わたししっかりしていただけるかどうか分からないわ」

「亮子さんや数馬とコンタクトを取っているよ・・・・・・・・おれ、考えたんだけど、この旅行から戻ったら一緒に暮らそう。いつまでも新鮮な意識を保ち続けるのは自分達次第だって気付いたんだ」

祐子の目から大きな涙が落ちた。電話口で祐子のしゃくり上げる声がした。

「あなた・・・・・・・・気を付けて行って来てね・・・・・・・・わたくし待っているわ」

賢がアパートから出ると既に亜希子がマンションの前に出ていた。ふたりはスーツケースを引きながら大通りに出た。そこでタクシーを待った。羽田からの飛行機は定刻に出発した。

垂水

鹿児島空港に着くと雨が降っていた。それほど酷い雨ではなかった。空港の滑走路の遙か向こうの山々が心なしか霞んで見える。ふたりはバゲッジクレームからスーツケースを取ると、直ぐに宿泊ガイドのカウンターに向かった。二部屋を確保できるのは指宿温泉の石崎ホテルだけだった。ふたりは取り敢えずそこに1泊することにして予約金を払った。そ

れからレンタカーを借りることにした。ここはレンタカーを借りた方が行動し易いと考えたからだった。レンタカーの案内係からフェリーのパンフレットを貰った。雨の中、知らない土地を走るのを憂慮して、ふたりはフェリーで直接指宿まで行くことにした。

会社からアパートに帰ると、祐子は賢からの連絡を待った。コンビニで買って帰ったアンパンと牛乳で夕飯を済ませた。テレビのスイッチを入れたが何となく落ち着かず、すぐにスイッチを切った。祐子は書棚から賢が買って来た和紙の色紙と絵の具を取り出した。コップに水を汲んで来てパレットに黄色の絵の具を絞り出した。しかし、そこに筆を持ってゆく気になれなかった。祐子は昨日のことを思い出した。雨に濡れた服を脱いだとき賢に後ろから抱きしめられた。賢の身体は冷たかった。賢が耳元で「冷たいな」と言った。昨日の賢は激しかった。祐子はベッドに仰向けに倒された。迫って来る賢に征服されてゆくのを楽しんでいた。祐子はくすぐったいような、時々気が遠くなるような快感を覚えた。その時の感覚を思い出して身体が熱くなってきた。賢からは電話が無い。スマホを手にして着信記録を見たが、1時間前に確認した時と変わらなかった。賢の激しさに祐子は身体が小刻みに震えるのを覚えた。賢が「証を作るぞ」と言ったのを覚えている。祐子は何度か気を失った。全身に広がる喜びを感じた後、朝までのことは何も覚えていなく、目が覚めたとき自分が積極的になっていたのを思い出した。祐子は「妊娠したかも知れない」と思った。賢の籍に入らなくてはと思った。依然として賢からは何の連絡も無い。時間は既に9時を回っていた。祐子は急に心臓が激しく鼓動し始めたのを意識した。様々に考えを巡らせ、亜希子のスマホに電話を入れようと決心した。「接続がらないところにいるか、電源が切れている可能性があります」との応答だ。3度電話して諦めた。祐子は数馬に電話をした。

「それはおかしい、賢の部屋に行って留守電に何か伝言が来ていないか調べてみる。折り返し電話するよ」

数馬が言った。10分ほどして数馬から電話があった。

「祐子、何かおかしいぞ。指宿の石崎ホテルから問い合わせの電話が掛かって来ていた。ついさっきの着信のようだけど、空港から予約を受けたがまだ着かないと言っている」

祐子は途端に不安に襲われた。その時スマホが鳴った。亜希子の母藤代登紀子からだった。

「もしもし、亜希子の母でございます。娘が旅行に出たのですが、連絡が取れないものですから、お伺いしていた祐子さんの番号にお電話させて頂いた次第です。何かご存じありませんでしょうか？」

「はい、わたくしたちも今、鹿児島と連絡を取ろうとしています。まだ宿泊先が決まっていなかったようで、どうやら空港で指宿のホテルを予約したようなのです。でも、そちらのホテルには着いていないようで」

「わたくし、空港のレンタカーの会社に電話してみます」

「申し訳ありません。何か分かりましたらご連絡頂けないでしょうか？」

祐子は了承して電話を切った。レンタカーの会社は4社あった。ほとんどの店は営業終了間際だった。対応した係の者が契約者リストを調べてくれた。3店目のレンタカー店が賢に車を貸し出していた。そのメモにフェリー割引と書いてあると説明してくれた。「フェリーを使ったのだろうか？」祐子の疑問は深まった。祐子は鹿児島のフェリーの会社に電話を入れた。電話の向こうで大勢の人たちが騒がしくしているのが分かった。電話に出た男は

「もしもし、何ですか？もしもし、えっ？」

と気忙しく話している。何かあったのかと思った。

「もしもし、東京の崎野と申しますが、今人を探してまして、フェリーに乗ったかも知れないのです。何か事故はありませんでしたか？」

「もしもし、事故？事故と謂うより、車が残ってしまって、運転していた人がなくなったんです。どうやら二人連れのお客さんだったようだけど。レンタカーのようなんだ」

「もしもし、もう少し詳しくお話しして頂けませんか？」

「ええ、ええ、7時半の船なんですけどね、鹿児島から乗った車のお客さ

んが、垂水たるみずに着いたとき居なくなっていたんです。途中で海に落ちたのかも知れないので、さっき警察に連絡したんです。レンタカー店にも連絡を入れたから、車の方は取りに来てもらえると思うけど。失礼だけど、お客さんの知り合いの方ですか？車にある荷物を取りに来てもらえませんか？」

祐子は声が震えた。

「はっ、はい。知り合いの者です。荷物は取り敢えず警察に預かってもらってください。わたくしは崎野祐子と申します」

祐子は住所や電話番号など、個人的な情報について質問を受けた。祐子には状況がよく把握できなかった。兎に角、賢と亜希子が鹿児島埠頭からフェリーに乗ったが、フェリーの中で失踪したということのようだった。「海に落ちたかも知れない」という男の言葉が耳に残っている。祐子はすぐに亜希子の家に電話を入れた。母親が出た。これまでに分かったことを説明した。母親はビックリした。「海に落ちたかも知れない」という言葉を反復して震える声で訊いた。

「本当に海に落ちてしまったのでしょうか？」

祐子も涙声になった。

「分かりませんが、フェリーが港に着いた時、ふたりの姿が消えていたと言っていました」

「ふたりと仰いますと？」

「私たちの友達の内観さんが一緒だったのです」

「わたくしには、ただ旅行に行くにだけしか言いませんでした。内観さんって、この間花巻に行った内観賢さんですか？」

「はい、私のフィアンセです」

祐子は言い切った。

「どうしてあなたのフィアンセと娘と一緒に旅行に出たのでしょうか？」

「調査のためです。あちらでいろいろな人たちに会う予定だったのです。今はそのことよりも、まずふたりの行方を捜さなくてはと思います」

「そうですわね。また何か分かったらお電話頂けませんでしょうか？」

「はい」

祐子は電話を切ると、涙が溢れ出してきた。自分が使ったフィアンセという言葉が頭の中で反復して響き、涙の流れるのを助長した。祐子は心の中で

「あなた、生きていて」

と言いつけた。夜中に鹿児島警察署から電話が掛かってきた。荷物の確認に来るようにとのことだった。祐子は朝まで睡れなかった。頭がぼーっとして立ち上がると身体がふらついた。洗面台のタオル掛けには賢の置いて行ったハンカチを洗って干してある。祐子はそのハンカチを手にとると右の頬に押し当てた。また涙が流れてきた。「もしかすると、あのレストランの時と同じように一時的な失踪かも知れない」という思いが頭を過ぎった。そうであることを神に祈った。

翌日の昼前に祐子と数馬そして亜希子の両親は鹿児島署に着いた。祐子の上司は不満そうだったが、親戚の具合が悪いという理由で強引に休暇の許可を取った。上司は「早く戻って来い」と言った。数馬も祐子からの連絡を受けて、すぐに休暇の手続きを取った。警察の捜査担当が

「昨夜から50人体制で捜査を行っていますが、ふたりは発見されておりません。明け方、ふたりのものと見られる帽子が桜島の近くの海に浮いているのが発見されました。これがそうですが・・・」

と言ってビニール袋から2つの麦わら帽子を取り出して見せた。祐子は青いリボンの帽子に見覚えがあった。賢が島根に行った時に被っていたもので、自分も被った記憶があるが、確か賢のアパートの帽子掛けに掛かっていた。もう一つはお揃いのようで、赤いリボンが付いている。亜希子の母親が赤いリボンの麦わら帽子に見覚えがあると行ったが、亜希子のものかどうか分からないとも言った。祐子は、昨夜は一睡もしておらず疲れ切っていた。嫉妬心さえ湧き起こらないほど気持ちが萎えていた。

「その青い方は、多分内観さんのものだと思います。でも赤い方は分かりません」

「もう一つあるんですが、これは船の甲板に置いてあったものです」

と言って、捜査担当はビニール袋から2足の靴を取り出した。1足は明らかに賢の靴だった。それを見た途端、祐子の目から大粒の涙が頬を伝わって流れた。亜希子の母親は顔面蒼白になり、

「娘のものです」

と言うと、倒れそうになって父親に身体を支えられた。父親が係官に訊いた。

「どういうことでしょうか？」

「これは申し上げにくいことですが、我々の推察では、おふたりは甲板に出ていて海に投げ出されたか・・・心中を図ったのだと思われます。昨日は雨が降っていて波もかなり高かったようです。普通こういう天候の時はあまり甲板に出る乗客はいないのです。何か理由があったのでしょうか。只、履き物が脱いで揃えて置いてあることから我々は心中の可能性も考えたのです。それに昨日のフェリーの乗客の一人が、おふたりが甲板に出て行くのを目撃しているのです。何でも、女性の方が下を向いていて、男性が女性の背中を抱えるようにして出て行ったようです。我々はそれらのことを総合的に判断して、心中の線が一番強いと考えました」

祐子がハンカチで目を拭ってから、涙声を押さえながら言った。

「心中ということは絶対に無いと思います」

亜希子の父親も頷きながら言った。

「わたくしどもも、娘が自殺をするような人間ではないと確信を持っています」

数馬が断言した。

「何か理由があって甲板に出たのでしょうか。賢は絶対自殺をする人間ではありません」

「ということになると事故の線が強くなりますね。原因は女性が気分が悪くなって外の風に当たるため甲板に出た。そして、男性が女性を介抱した。甲板が雨で滑りやすいので、履き物を脱いで裸足になった。デッキにいるとき船が揺れるか何かの原因で海中に投げ出された・・・ということだと納得がいきます。まだ捜索は続けていますし、夏ですから助

かる可能性はあります」

4人は鹿児島埠頭に行った。ふたりの乗ったのと同じフェリーに乗って垂水埠頭との間を往復してみた。空は晴れ渡り、桜島を望む景色は壮観だった。4人は祈るような気持ちで海面を凝視していた。海の広がり強く感じた。この海上にふたりの痕跡を探すことは困難を極めることだと分かった。途中で捜索の為の探索船と思われる船舶に出会った。祐子は心の中で「あなた、生きていて」と繰り返した。亜希子の両親はヘリコプターでの捜索を依頼した。その捜索は3日間行われたが、ふたりの新たな痕跡を発見することはできなかった。祐子は2日目の朝、友達に電話を掛けた。友達は祐子が鹿児島に居ると言うのと、なぜ事前に連絡をくれないのかと言ったが、祐子が涙声で事情を話すと、夕方ホテルに来ると言った。友人の慰めの言葉も祐子には虚ろに響いた。しかし、鹿児島に友人がいることは心強かった。友人は何度も祐子を励まして帰って行った。3日目の夕方になって海中捜査の終了を告げられた。4人は翌日の朝の便で東京に戻った。亜希子の父親も、数馬も仕事のことは微塵も口にしなかった。しかし、仕事をしているときの何倍も疲労感を覚えて帰宅した。警察の捜索は1週間で打ち切りとなった。結局「ふたりは海中に転落し、波に浚さらわれたと思われる」という結論になった。暗に賢たちの死亡を宣言しているように祐子には思えた。東京に戻った日、祐子は賢のアパートの部屋で鹿児島の警察から受け取った賢のキャリーバッグを開けてみた。鹿児島から戻る途中、数馬が賢の荷物を調べると言ったが、祐子が自分と賢とは既に普通の仲ではない。自分が調べると言い切った。数馬はそれほど驚かなかった。以前から賢と祐子の関係を気付いていたようだった。数馬は賢の荷物を祐子に任せた。祐子は衣類を1枚ずつ取り出しては胸に抱きしめ、畳み直して賢のベッドの上に並べた。賢の事故を裏付けるようなものは何も無かった。すべて祐子が知り尽くしているものばかりだった。祐子は涙が涸れてしまうほど泣いた。衣類の他にはトラベルセットと3冊のノート、筆記用具があるだけだった。脱力感が身体を支配していた。祐子はまるで意識を喪失したかのように虚ろな状態で黙々と荷物を整理した。衣類を整理し終わると3

冊のノートをダイニングテーブルの上に置き、椅子に腰掛けて暫くぼーっとしていた。次第に賢と過ごした時間に引き戻されていって、ふたりの歓びに満ちた光景が頭の中を駆け巡った。今日はここに寝ようと思った。微かに賢の体臭を感じさせる布団に潜り込んだ。

憂鬱な時間が過ぎてゆく。鹿児島から戻ってから、祐子は何かをしようという意欲が全く無くなった。既に1週間が経過している。横になって目を閉じ、賢を想った。身体が熱くなってきて涙が頬を伝って流れた。流れた涙で枕が染みだらけになっている。もし賢がこのまま帰らないのなら、死ぬことに決めた。ベッドでうとうとしているとスマホの着メロが鳴った。祐子は「時の流れに身を任せ」を着メロに使っている。音が空しく響いた。亜希子の母親からだった。

「その節はご苦労様でした。まだ内観さんも娘も見つかりませんが、あの子は一人娘で、わたくしどもはあの子を失ったら生き甲斐が無くなってしまいます。でも、どうすることもできません。せめて貴女にお会いして、つい最近の娘のことなどをお伺いできないかと思ひまして」

「はい・・・・・・・・」

「あなたがお気を落とされているのはよく分かります。いろいろお話をさせて頂きたくて、一度わたくしどもの家にいらして頂けないでしょうか？」

祐子は気持ちを振り絞って応えた。

「分かりました。今度の土曜日に伺わせて頂きます」

祐子は亜希子の家が大きいのに驚いた。周りに石造りの壁が張り巡らされており家の中は見えない。門は10メートルほどの幅があり、横に2メートル幅の通用門も設けられている。青山のビルの中にこんな家があるのが信じられなかった。通用門にインターホンが埋め込まれている。祐子が呼び鈴を押すと使用人と思われる女性の声で

「奥様がお待ち致しております」

という応答があり、通用口の扉が自動的に開いた。祐子が入ると扉は自動的に閉まりロックされた。門からは敷石のアプローチが続き、その道の両側には高さ10メートルほどの樫が3メートル程度の間隔で

植えられている。30メートル程奥に家があった。2階建ての屋敷で、玄関は旅館のフロントのような広さがあった。造りは和風だった。玄関の前には使用人と思われる30歳前後のやや小柄な落ち着いた感じの女性が外に出て待っていた。

「いらっしゃいませ。奥様がお待ち申し上げております」

玄関を入ると奥まで廊下が続いていたが、使用人の女性は入ってすぐ左手の扉を開けた。40畳ほどもある広い応接間だった。応接間の奥は縁側になっている。窓は2枚の大きなガラス張りで、庭が一望の下に望めた。植木はよく手入れがされているようで、京都の寺院でよく見かける日本庭園を思わせるほどの造りだった。応接間の中央に10人以上が腰掛けられるほどのレザー張りのソファが並べられており、中央に大理石で出来たテーブルが置かれている。祐子は白のワンピースに紺色の太目のベルトをし、薄黄色のジャケットを身に付けている。胸にワンポイントで賢からみやげに貰ったブローチを飾っている。藤代登紀子の目には祐子が清楚で、それでいて艶やかな姿に映った。登紀子は応接用の一人掛けの椅子に腰掛けていたが、祐子の姿を観ると直ぐに立ち上がった。

「こんな時にお呼び立てして、申し訳ありません。さあ、どうぞお掛けください」

そう言って祐子の着席を促した。祐子が「失礼します」と言って着席すると登紀子も腰を掛けた。先ほど出迎えてくれた使用人の女性が、冷たい薄茶あられと水羊羹を持って来て祐子と登紀子の前に置いた。

「友子さん、アルバムを持って来てくださいな」

と登紀子が言った。お手伝いの女性は「はい、奥様」と言って出て行った。登紀子の目に涙が浮かんだ。

「祐子さん、悲しい出来事で苦しいでしょう。わたくしたちもこの悲しみをどうしてよいか分かりません。ついさっきまで親戚の者が見舞いに来ていたのですが、あなたがいらしてくださるからとお話しをしてお引き取り頂いたのですよ。新聞社や雑誌の記者などが引切り無しに来ていたのですが、今は少し静まったのですよ。あなたの方はいかがです

か？」

「はい、わたくしはあのまま内観さんのアパートに行き、あそこに3晩泊まりましたので、まだ記者の方達には出会っておりません。私のアパートにも来ていたのかも知れませんが」

「直ぐに追い回されますわよ。あなた暫くここにいらしたらよろしいわ」

「えっ？」

「きのう主人と相談したのよ。主人も本当は是非あなたにお話ししたいと申しているのよ。でも、流石に会社を放っておけないと見えて、わたくしに任せて出掛けてしまったのですよ。わたくし達は亜希子を溺愛して育てましたので、亜希子がどんな子かよく分かっているつもりなの。あの子はあまり友達を作らなかったの。わたくしたちが心配するほどで、心のきれいな人とお友達になりたいって言っていましたのよ。それがここにきて、皆様方とお友達になれてとても喜んでおりましたのよ。わたくしたちはそんなあの子の選んだお友達ですから、一寸失礼な言い方になってしまうかも知れないけど、無条件に信用させて頂いたのよ」

「わたしたちはお考え頂いたほど心がきれいな人間ではありません」
祐子は元氣なく応えた。

「あの子には誘拐事件があった後、暫くボディガードを付けたこともあったのよ。でも、あの子が嫌がりますでしょう。ですから、それも止めましたの。でも、山陰に旅行に出掛けた時には、あの子には内緒でまたボディガードを雇いましたの。あの子に気付かれないようにガードするという条件を付けましてね。あの子は内観さんや、あなたとしか接触していなかったようですので安心しておりました。それがこの間、わたくしたちがお見合いの話を勧めたばかりに、あの子の気持ちが動転してしまい、あなたもご存じのようにいろいろなことが起きてしまいました。あの子が花巻から帰ってから主人とも相談したのですが、できるだけあの子の気持ちに添った形であの子をサポートすることに致しましたの。わたくしたちの身勝手をあなたに押し付けるようで申し訳ないと思っていますのよ」

「いいえ、わたしたちは亜希子さんの友達というだけです」

「祐子さん、わたくしたちがあなた達を支援させて頂きたいの」

「えっ！どういうことでしょうか？」

「わたしたちは、あの子が時々消えてしまうという現象を起こすことを知っております。もう大分前ですが、そう、誘拐事件があつてから1月ほどしてからでしょうかしら、あの子がわたしたちとここで話をしていたのですが、お化粧室に立ってから戻って来なかったの。わたくしと主人、それにお手伝いさんや運転手さんにも手伝ってもらって探したのですが、どこにも見当たらなかったの。1時間ほど外を探してここに戻って来た時、娘が戻っていたのよ。わたくしたちは娘にそのことをお話したけど、お化粧室に行っただけだと言うのよ。このことはお手伝いさんや運転手さんに口止めしたの。娘にもわたくしたちが気付かなかつたかのように振る舞ったわ。ですから、あの子はわたくしたちがこのことを知っていないと思っているはずですよ。こんなことが何回かありましたのよ。そんな訳で、花巻の時のことも何か変だと思っているのよ。内観さんから、あなた達が失踪事件を調べているとお聞きして、なんとか加勢できないかと主人と相談していたのよ。そんな折、今度のような事件が起きてしまったの。祐子さん、わたくしたちにあなた方の支援をさせて頂けないかしら？あの子が消える現象の原因を突き止めたいの。主人と、私立探偵とか弁護士事務所とか、そのほかの可能性も検討したのだけど、このようなことは経験がないところばかりで全く失望してしまいましたのよ」

「わたしたちにとっては願ってもないことですが・・・」

「もしご異存がなければ、もう少し詳しいお話をさせて頂きたいのですが、よろしいかしら？」

「はい」

「その前に、あなたは内観さんとどういうご関係なのかしら？」

「わたしはフィアンセと思っています」

「そうですか。でも、内観さんは、どなたとも結婚する意思がないようだと言っていたのですが」

「はい、フィアンセはわたしが思っているだけかも知れません。でもわ

たしは内観さんを愛しています。今まではこのことは誰にも話しませんでした、彼が海に落ちてしまって……」

祐子の目から涙が流れ落ちた。涙をハンカチで拭くと

「……わたしはあの人と共に生きることに決めています。ですから、あの方が死んでしまったのなら、私もすぐに後を追います」

「内観さんもそのつもりですか？」

「はい」

祐子ははっきりと答えた。

「分かりました。でも、わたくしは内観さんとあの子が死んだとは思っていませんのよ。生きていたような気がします。海に落ちたことは事実のように見えますが、どうしてそれを確認したらよいか皆目見当が付きませんわ」

「わたしたちも初めは全く見当が付きませんでした、いろいろな失踪事件を調べている間に、少しずつこの失踪事件が人の心や意志の動きに連動しているらしいということが分かってきました。内観さんはかなりのところまで分かってきているようです」

「あなた、ご家族は？」

「両親は私が物心付いた頃に亡くなりました。わたしはまだ小さかったので叔父の家に預けられ、大学を卒業するまでそこで育てられました。私が東京に出て来る時、父の遺産の残り分だと言って少しお金を持たせてくれましたが、それでわたしはもう叔父達とは分かれる決心をしました。ですから今は、見寄はありません」

「違っていたらごめんなさい。もしかして、あなたはあの崎野家の一人娘の祐子さんですか？」

祐子は一瞬どうして自分のことを知っているのだろうかと思ったが、それ以上考えを巡らせることはしなかった。

「はい……でも、今はもう両親の生きた足跡は過去のものになりました。わたし自身とは関係ありません」

「あなた、今の会社を辞められますか？」

「どういうことでしょうか？」

「わたくしたちが、今のあなたの月収の2倍のお金を毎月払います。そのお金で内観さんがやっていた調査を続けることはできませんか？それと、あなたがよろしければ、今お住まいのアパートを引き払ってこの家に住んでみませんか？」

「えっ！」

「わたくしたちは鹿児島に行った時、あなたの淀みのない性格と優しさに心を打たれましたのよ。そのあなたが悲しみに打ちひしがれている姿を見るに耐えなくて、近くに置いて守ってあげられないかと、主人とも話していたのですよ。わたくしたちもあの子が居なくなった寂しさを慰められますし。それに、これから記者の人たちに追い掛け廻されるでしょう。警察とのいろいろな対応も大変でしょう。わたしたちには使用人がおりますから少しは役に立つと思いますし、事前に約束の無い者はこの家には入れませんので安全ですわよ。わたくしたちはあなたの生活に一切干渉しませんわ。出掛ける時と帰って来た時が分かればそれでよろしいのよ」

「でも、わたしはそんなことをして頂けるような立派な人間ではありません。あまり頭もよくないし」

「よろしいのよ、ありのままのあなたで。今すぐお返事頂かなくてもよろしいのよ。よく考えてから応えて下さいな」

祐子は、もし賢が帰還できたときに賢とふたりきりの時間を過ごすことが難しくなることや、折角覚えた仕事を捨てることへの未練、数馬や亮子のアパートから離れてしまうことなどいろいろ考え、賢のいない寂しさの中で思い悩んだが、結局賢を探すことが絶対条件だと自分に言い聞かせた。それ以外のことは総て二の次だという結論に至った。1週間して祐子は藤代登紀子の提案を受け入れることにした。生きているにしる、既にこの世のものでないにしる、何としても賢を探し出したかった。そのことを思うと涙が流れたが、同時に亜希子も探し出さなくてはと自分に言い聞かせた。一旦肯定の返事をする、それからの処理は藤代登紀子の指示によって電光石火のごとく進められた。指示は登紀子が雇い人に与えているだけで、祐子に対しては時々「ここに印鑑を押して欲し

い」とか、「ここにサインをして欲しい」と言うだけだった。自分ではこれといった手続きもしない内に祐子は藤代家に取り込まれてしまった。それまでの間に鹿児島島の警察署や保険会社などからいろいろな問い合わせがあり、ほとんど寛ぐ時間を持てなかった。それに輪を掛けて新聞や雑誌、テレビ局に追い掛け廻され始めた。祐子はできるだけアパートに戻る時間を遅らせた。数馬から電話を受けたが同じようなことで愚痴をこぼしていた。藤代肇の指示は徹底していた。祐子のアパートの解約は勿論のこと、賢のアパートも合法的に解約し、賢の荷物は全て藤代家の倉庫に収納された。とは謂え、一人暮らしの男性の持ち物にたいしたものは無かった。驚いたことに、藤代肇はつい先日契約しまだ家具を設置したばかりの亜希子のマンションから亜希子の荷物を全て自宅の亜希子の部屋に戻し家具類は処分してしまった。マンションは空室のままに放置して置くつもりのものであった。その処理が終わったのは祐子が返事をしてから3日後の昼頃だった。祐子の退社も、既に藤代肇の手が廻っていて、いつも不機嫌な部長も機嫌良く承諾し即日退社となった。同僚達は驚いた。祐子は同僚一人一人にお礼の挨拶をして廻った。そんな訳で、3日後の夕方には祐子は登紀子が出迎えてくれた藤代家の玄関を潜っていた。

「いろいろありがとうございました」

「よかったわ。わたくしたちもこれから娘のいない苦しみが軽くなるわ。さあいらして、祐子さん。あなたのお部屋に案内するわ」

祐子の部屋は2階にある亜希子の部屋の隣の部屋だった。大きさは優に20畳はあると思われるリビングルームにバス、トイレ、簡単なキッチンもあり、祐子の持っていた応接セットとベッド、冷蔵庫、書棚、ダイニングテーブルセットが既にきちんと設置されていたがそれでも十分の余裕があった。洗面所には洗濯機も用意されていて、まるでワンルームマンションのような感じだった。部屋の作りは祐子の居たアパートの比ではない。1枚ガラスの窓際からは森のような庭が一望に望め、その向こうにビルの乱立しているのが伺えた。

「祐子さん、いかがかしら？」

「ありがとうございます。こんな素敵なお部屋に住まわせて頂いて、何とお礼申し上げます。よろしいやら」

「このお部屋はゲストルームだったのよ。あなたが住み易いように少し改装したのよ」

「ありがとうございます。とても素敵なお部屋です」

「気に入って下さってうれしいわ。祐子さん、一つお願いがあるのよ。できるだけ私どもとお食事を一緒にして頂きたいの。よろしいかしら」

「はい、喜んでそうさせていただきます」

「早速、今日からでよろしいわね。今日はごちそうを用意させているのよ」

祐子は微笑んだ。久しぶりに口元の緩みを覚えた。それと同時に祐子の目に涙が浮かんできた。まるで家族のように優しくしてくれる登紀子に、記憶にも残っていない母親のイメージを感じたような気がした。登紀子は祐子に茶封筒を渡しながらか言った。

「これが今月のお給料よ。あまり頑張り過ぎないでね」

「今はまだ戴けません。何もしていませんし・・・」

「前払いに決めたのよ。だってそうでしょ、活動費がいるのですからね」

「こんなにさせて頂いてよろしいのでしょうか？」

「わたくしたちにはあなたが一緒に居てくださるだけで、この上ない喜びなのよ」

夕食は藤代肇も一緒だった。ダイニング専用の部屋だった。広い部屋にダイニングテーブルが用意されていた。今日は都内のホテルのシェフを呼んでフランス料理のフルコースを準備してあるとのことだった。赤ワインを飲みながら藤代肇が言った。

「祐子さん、よく決心してくれました。これからは家族の一員と思って、何でも自由にしてください」

「そうよ、祐さんはこれからは娘同様よ。亜希子にお姉さんができたのよ」

「すっかり甘えてしまって申し訳ありません。わたしのようなものを置いて頂けて、とても感謝しています」

「祐子さん、これからは祐子と呼び捨てにさせてもらおうよ。食事の後で、少し庭でも散歩してみようか。外の車の音もあまり聞こえないようにしてあるから」

藤代肇も登紀子も鹿児島にいた3日間ですっかり祐子を気に入っていた。しかし、その時は祐子の個人的なことについては一切質問しなかった。数馬は藤代肇を意識しているようで、見ているとその礼儀正しきや頭の切れの良さを売り込んでいるような印象を受けた。しかし、それも控えめだったため、むしろ4人の中にある種の心地よい緊張感とでもいう雰囲気を作り出していた。

食事を終わると藤代肇は祐子を促して外に出た。家の周りをぐるりと一周する形に庭が造られていて、庭の中を散策できるように歩道が設けられている。池が2カ所にあった。玄関に近い方の池にはアーチ状の石橋が架けてあり、「毎朝ここから池の錦鯉に餌をやるんだ」と藤代肇が説明した。

「ところで、祐子は内観さんのフィアンセと言っていたな。だがそのことは外では口にしないほうがいい。週刊誌の記者やテレビ局が目くじらを立てているから。もう変な記事を書いている週刊誌もある」

「はい、済みませんでした。わたしも警察でフィアンセなんて言ったのを後悔しています。でも、わたしは内観さんを愛しています。内観さんもわたしを愛してくれています」

「うん、そのことは妻から聞いた。しかし、暫くは誰にも言わない方がいい。週刊誌が、亜希子達が心中したと書き立てているし、内観さんのことを愛人のいる男と呼んでいるようだ。内観さんを悪人のように扱っているんだ」

「分かりました。今のことは今後誰にも話しません」

祐子には藤代肇が娘亜希子のことを思って話していることが、痛いほど伝わってきた。

「今度、一度失踪事件について分かっていることを説明してくれないかな。妻から聞いたと思うけど、わたしたちも亜希子が失踪する可能性を秘めていることを知っているんだ。何とか原因を見つけなければならな

い。今回の事故でも警察は「海に落ちた」と言っているが、わたしは失踪に絡んでいるんじゃないかと思っているんだ」

「先ほど奥様からお金を戴きました。ありがとうございました。早速明日か、明後日から暫くの間鹿児島に行きたいと思います。あそこでは以前、原智明さんという方が失踪しているのです。内観さんはその調査のためにあちらに行きました。私が内観さんのしようとしていたことを続けてみたいと思います」

「うん、原智明さんのことは聞いている。まだ内観さんの記憶も新しいのに辛いだろうが頑張りなさい。もし何か必要なことや困ったことがあったらすぐに言いなさい。いつでも、どこからでも、妻かわたくしの秘書に連絡を取ってくればすぐに対応するから」

そう言って藤代肇は妻と自分の秘書の電話番号を書いたメモを祐子に渡した。祐子は部屋に戻ると自分の衣類を確認した。唯のクローゼットと思っただ部分はウオークインクローゼットになっていた。そこに今まで衣装箱に詰めてあった衣類を釣り下げた。持っている衣類を吊るすのにはクローゼットの3分の1も必要なかった。祐子は賢が喜んだ衣類を選んで1列目のハンガーに、あまり反応の無かった衣類を2列目に分けて収納した。祐子は心の中で「あなた、生きていて」と呼びかけた。「賢は自分の心の中を見抜いている。自分の身体の隅から隅まで知っている」そう思うと身体が熱くなってくるのを覚えた。そして、もしかしたらもう2度と賢に会えないかもしれないと思うと、熱くなった身体も冷めてきて、急に悲しみが込み上げ目が潤んでくるのだった。

祐子は賢達が乗った便と同じ便を使った。宿も出発前に指宿の石崎ホテルを予約した。賢達が予約したホテルだ。このホテルは賢と亜希子の不着に対してキャンセル料を請求しなかった。そういう点で良心的なホテルだと祐子は思ったのだった。空港からはリムジンバスで鹿児島埠頭に向かった。10日ほど前にここで不安と悲しみの淵に立った4人が連れ立ってフェリーに乗ったことを思い出した。そこからの賢や亜希子の足取りがどうしても腑に落ちなかった。鹿児島から指宿に直接行くフェリーは運航されていないのだ。何故垂水に行こうとしたのか。賢が誤って

乗船するはずはなかった。祐子は賢と亜希子が垂水かその近辺で誰かに会おうとしていたのではないかと思った。失踪した原智明は鹿児島から西に10キロほど行った日置市に住んでいて、そこから鹿児島市内の会社に車で通っていた。研究会の事務所は鹿児島市内にあった。空港から指宿まで車で3時間も掛からない。フェリーを使うと乗り換え時間を入れて4時間以上掛かるはずだった。やはりフェリーを使わなければならない必然性があつたに違いないと祐子は考えた。賢の姿が眼前に浮かんで消える。祐子はその日はとりあえず宿に行くしかないと思った。鹿児島埠頭から鹿児島駅まで、キャリングケースを引きながら歩いた。日差しが強く汗が滴り落ちてきた。祐子は歩きながら、亜希子の両親が自分を自由に活動できるようにしてくれたことに感謝した。もしあの時藤代肇と登紀子の救いの手が差し伸べられなかったら、自分は多分自暴自棄になって会社を辞め、この鹿児島に来ていたに違いない。

鹿児島から指宿枕崎線に乗った。電車は空いていた。祐子の乗った車両には2組の観光客風のグループと、地元の人と思われる人たちが10人ほど乗っていた。指宿までは1時間程掛かった。山肌に沿って走り、田園風景の中を進む電車の車内に、サツマイモを発酵させたいわゆる薩摩焼酎の臭いが漂ってきて鼻を突いた。誰かが車窓を開けているのだ。指宿駅で降りると、駐車場の脇に南国を思わせる椰子の木が数本植えてあり、南国調の静かな空間が広がっている。祐子はホテルに電話した。空港で予約を入れた時、指宿駅に迎えに来てくれると言っていた。10分ほど待つとドアに石崎ホテルと大きく書いてあるライトバンが来た。「崎野様でいらっしゃいますか？お待たせ致しました。石崎ホテルです。ようこそいらっしゃいました。お荷物はこちらでしょうか？」

祐子が頷くのとほとんど同時に運転手が横に置いてあったキャリングバッグを車に載せた。祐子は慌しい人だと思ったが、言われるままに車に乗り込んだ。運転手は早速祐子に話し掛けてきた。

「いい天気ですよろしいですね。でもお暑かったですでしょう。どちらからいらっしゃったのですか？」

「東京からです」

「飛行機でいらしたのですか？」

「はい」

「指宿は初めてですか？」

「いいえ、わたしの友達が鹿児島にいるんです。一度友達を訪ねてこちらに来たことがあります。もう5年ほど前のことですが」

「そうですか。こちらへは観光でいらっしゃったのですか？」

「いいえ、少し調べたいことがあります」

「そうですか？どんなことをお調べになるのかお聞きしてもよろしいですか？」

「はい、先日鹿児島湾で行方不明になった人を探しているのです」

「そうでしたか。あの事故のことを調べにおいでで」

「はい」

「あの事故もよく分からない事故でしたね」

そうこうしているうちにホテルに着いた。運転手は車の扉を開けて祐子に「足下にお気を付けて」と言うと、後部ドアを開いて荷物を降ろし、それをフロントまで引いて行った。石崎ホテルは南国のイメージを印象付けるようなホテルだった。建物の周りに蘇鉄が植えてあり、そのために外からロビーを窺うことができない。フロントの女性は20歳前後で小柄だった。

「いらっしゃいませ。ようこそ石崎ホテルにお越しくださいました。海岸に面したお部屋をご用意致します」

先ほどの運転手が部屋まで荷物を運んでくれた。祐子は礼を言って部屋に入り、畳の上にしゃがみ込んだ。急に疲労が襲ってきた。電話のベルで目が覚めた。8時を回っていた。食事を摂るようにとの案内だった。チェックインの時、7時から食事が摂れると案内していたのを思い出した。祐子はすぐ食事の用意されている大広間に降りた。大半の客が既に食事を済ませていた。30ほどあるテーブルの内まだ食事の客は3組で、窓際の席からは食事を終えた人たちが順次席を立って行った。仲居がやって来て飲み物の注文を聞いた。祐子はあまり意識せずにビールを頼んだ。賢と一緒に泊まった宿ではいつもビールを呑んだ記憶があった

からだ。仲居がビールをグラスに注いでくれた。あまり食事に手を付けずにビールを飲んだ。自分でも酔いがまわってきていると感じた。メインは肉料理だった。祐子は酔いの物と煮物に手を付けただけで、ビール瓶が空になると席を立った。足下が覚束ないような気がした。そこから部屋へは一度ロビーを抜けて行かなくてはならない。祐子はロビーにあるソファに腰掛けてぼんやり賢を思った。

「失礼ですが、お一人でお泊まりですか？」

祐子は虚ろな目を声のする方に向けた。27, 8歳の背広を着た男性が立っている。

「えっ？」

「こちらに掛けさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「・・・どうぞ」

男は祐子に向かい合って反対側のソファに腰掛けた。

「どちらからお越しで」

「・・・・・・・・」

祐子はふっと息を吐いただけで応えなかった。

「ごめんなさい」

祐子はそう言って立ち上がった。立ち上がる拍子に身体がふらついた。

男がすぐに立ちあがり、

「大丈夫ですか？」

と言って祐子の腕を支えようとした。祐子は息を吸い込んで男からパッと遠ざかったが、男は祐子の腕を取ろうと手を差し伸べたまま後を追って来た。

「本当に大丈夫ですか？」

「放っておいてください」

祐子は急ぎ足でそこを離れた。エレベータを使おうと思ったが、男が来る気配を感じて階段で行くことにした。2階まで駆け上がると男が後から附いて来るのが分かった。祐子は早足で歩いた。男は素知らぬ顔で歩調を早めて来る。階段を上がり切ると男はもう3メートルほどに近付いている。祐子は廊下を駆けて部屋に入り中から鍵を掛けた。男がドアの

前を通り過ぎたのが分かった。暫くして祐子は賢のトラベルバッグの中から3冊のノートを取り出し「失踪事件調査ノート」を開いてみた。7つの失踪事件について4ページ置きにタイトルと事件の概要が記入されている。そして、既に調査を行った第1の浄蓮の滝、第2の遠野、第4の大山に関しては多くの書き込みがあった。更に第8のケースとしてあのレストランでの賢と亜希子の消滅、第9のケースとして大山での亜希子のテレポーテーション、第10のケースとして亜希子の花巻へのテレポーテーションが記入されている。第2の遠野の消滅事件の考察欄には「意識の働きで、人はあらゆることを現実化できる。消滅したのも一つの強い意識の働きによるものだと思われる。消滅した人の意識と消滅させようとする存在の意識が同調した時に消滅は起きると思われる」と書かれている。祐子はノートの最後のページまでさっと繰ってみた。最後から2ページ目に、〈意識の働き〉というタイトルが打っており、そこに賢の見解が述べられていた。

「人はいつも選択している。無意識の選択の結果が今ここにある人生の形を創っている。クリシュナがアルジュナに言った言葉を忘れてはならない。選択を迫られた時、何を選ぶかによりこの世界に存在した意味が異なってくる。クルクシェートラの戦いでパーンダヴァ家と戦う時、クリシュナは哀れみより正義を選ぶように教えた。そしてもっと大事なことは、アルジュナに勇気に基づいたもっと強い意識を持つように諭していることだ。グルジェフも自己生起せよと言っている。これも生きた意識を持つということだ。和尚は思考の道を捨て、唄い、踊り、意識の世界で生きよと言っている。意識を正の方向に向け、感謝と感動の中に入れて絶対存在の世界が現れ、すべてが自分を祝福してくれる。意識を負の方向に向け、落胆や嫌悪の中に浸っていれば、地獄のような負の世界を形作るあらゆる要素を引き付ける」

賢はそこにこの事件の最終的な結末を予測している。

「全ての失踪者は違う時空間に迷い込んでいるのだと思われる。つまり、この世界の観点からすると生きていうことだ。失踪した者が持つ意識がこの世界から求める者の意識と合致すれば生還できるはずだ」

祐子の胸に灯火が灯った。賢と亜希子は海に落ちたかも知れないが死んだという形跡は無い。絶対生きていると感じた。必ず探し出そうと決心した。そう決めると気持ちが軽くなった。今まで悩んでいた自分が可笑しかった。自分は賢が消えた悲しさに捕らわれ、負の意識を持ち続けたため、さっきの執拗な男の追跡を受けたのだと考えた。折角亜希子の両親が用意してくれたこの上ない条件を無駄にしてしまうところだった。祐子はペンを取り出し、第10のケースの4ページ後に第11のケースとして「賢と亜希子の鹿児島での失踪」と書いた。そしてノートに賢が書いたのと同じように先ず「事件の概要」と書きこの出来事の概要を記入した。次に「調査項目」として1. 人間関係、次の行から一行置きに2. 地域情報、3. 周囲環境情報、4. エントロピー、5. 物質的側面、6. 精神的側面、7. 時間的側面、8. 空間的側面、9. 意識的側面、10. 判断 と書き、最後に、「考察」の欄を設けた。そして10の判断の箇所に、「生還可能」と書いた。一旦ノートを閉じると祐子は浴衣に着替え風呂に行くことにした。既に酔いは醒めている。浴室はさっき食事をした大広間の奥にある。階段を降りてロビーに出た。さっきの男が浴衣姿でソファーに腰掛けていた。祐子はいつもの祐子に戻っていた。男と目が合うと祐子は軽く会釈した。男は寄って来て、「今からお風呂ですか？」

と言った。

「ええ」

男は祐子の胸の辺りをちらりと見て、

「あとで、一杯如何ですか？」

と言った。

「済みません、連れが待っておりますので失礼致します」

男は一寸祐子の来た方を見てから

「そうですか、それは残念」

と言ってソファーの方に戻って行った。祐子にはそれ以上付け入る隙が無かった。男はソファーに座ると風呂から上がって来たと思われる若いふたりの女性の方に視線を移した。祐子は小気味よさに微笑みながら風

呂に向かった。指宿の風呂は海岸線に面している為か塩分を含んでいるようだった。石鹸の泡立ちがあまりよくない。浴場には5人ほどの中年の女性が入っていた。鹿児島弁の大声で話している。祐子は静かに湯船に浸かった。湯船は10メートルほどの長さがあり海岸線に沿うように造られていて、半分曇った窓からは遠方の光が海面を照らしているように見える。しかしそれはガラス窓に映った浴室のライトの反射光だと気付いた。よく見ると海は漆黒の中にあっただ。「ふたりは海の中にはいない」という感覚が確信に近くなってきた。祐子には賢達のような超常的な経験は無い。自分の五感に頼って調査を進めるしかないのだ。明日は鹿児島の原智明研究会の事務所に行ってみようと考えた。部屋に戻ると電話機のメッセージランプが点滅していた。フロントに電話すると鹿児島の友人内村沙織からの「電話を欲しい」というメッセージを伝えられた。祐子は東京でホテルの予約を取ってから沙織に電話をしていた。沙織はやや小太りで小柄な一見堅苦しいイメージを持った女性だが、祐子と同じような屈託のない明るい性格をしている。鹿児島に着いたら直ぐに電話をよこすように言っていた。しかし、祐子は気力が失せていて、そのことをすっかり忘れていた。この石崎ホテルには1泊の予約しかしていなかった。明日は鹿児島市内のホテルに泊まるつもりだった。そのことで沙織に相談する必要もあったのだ。沙織の声は明るい。

「もしも祐子、遅かったじゃないの。今日は指宿でしょ。明日の予定はどうなっているの？」

「ごめん、一寸うっかりしていて。今お風呂に行って来たばかりよ。明日の宿をこれから探そうと思って。沙織、鹿児島市内にいいところ無いかな」

「馬鹿ね、わたしんちに泊まればいいじゃない」

「でも、悪いわよ」

「いいのよ。そのつもりで、明日お休みを取ってあるから」

「ほんと！感謝！・・・じゃあ、明日チェックアウトしたらすぐに鹿児島に向かうわ」

「何時頃になるかな」

「こっちを8時にはチェックアウトするわ」

「それだと、大体10時頃かな」

「うん、電車の時間が決まったら電話するわ」

「うん、待ってる。それじゃあ明日ね」

沙織は鹿児島駅に軽乗用車で来ていた。祐子は沙織の姿を見付けると、急いで近付いた。

「沙織この間はありがとう。あの時は気が動転していて、ろくに話もできなかったわ。ごめんね」

「いいのよ。だけど、今日は元気じゃん」

「賢くん絶対生きているって確信したのよ。そうになると、こうしちゃいられないと思って自分に渴を入れたんだ」

沙織はクックと笑った。

「あんた、内観さんのこと好きなんじゃないの？」

「分かる？」

「分かるわよ。いつも内観さんのことしか話さないじゃない。どこまでいったの？」

「うふふっ、どこまでだと思おう？」

「ねえ、もういくとこまでいったの？」

「さあね」

「それはごちそうさま。今日はお昼祐子の奢りね。この近くにおいしい豚骨ラーメンの店があるのよ。行ってみる？」

「うん、だけどまだ一寸早いじゃないの。その前に警察に寄ってみたいの。その後何か分かったか聞いてみたいのよ」

「そうだね」

ふたりは警察の捜査第1課に行ってその後の経過を聞いた。警察は既に心中か事故死と決めて掛かっているようで、祐子は話を聞いていても気分がよくなかった。

「それじゃ、もう生きている可能性は無いということですか？」

「そんなことは言っていないませんが、まあ生存の可能性は非常に低いでしょうね」

祐子は心の中で、「彼らの判断も止むを得ないか」と思ったが、同時に「見てらっしゃい、わたしが探し出して驚かせてやるわ」と意気込んだ。賢がよく言っているように普通の人にとって、海の上の様な逃げようのない場所で消息を絶つということは死を意味するのだと思った。この日も暑かったが、猛暑の続いた先週に比べると暑さも峠を越えたような感がある。しかし、木々のある場所では蝉の音が暑さを際立たせていた。豚骨ラーメンの店は駅前から少し離れた県道の脇にあった。祐子は「こってりしていて美味しい」と思った。久し振りに食べ物の味を味わったような気がした。

「わたし、賢くんが活着していると決めたらすべてに前向きになったの」
「ふうん、そんなものかな」

沙織はそう言いながら麺を啜った。祐子は「沙織が麺を啜っている時の顔はお多福に似ている」と思い、そんな風を感じた自分の気持ちを責めた。

「今日ね、夕方コンパがあるのよ。祐子も来てみない？会社の仲間が5人いるから原智明さんのことも聞けるわよ。わたしは彼とは別の部署だったから祐子に話したことは又聞きなのよ。原智明さんと同じ部署の人が2人いるのよ。きっと、わたしより詳しい情報を持っていると思うよ」
「うん、行く行く、後で連れてって。ところで午後はもう一度フェリーに乗ってみようと思うのよ。船の上で甲板に出てみるわ」

祐子と沙織はフェリーの甲板で海を見つめていた。桜島が美しい。

「御岳おんたけはいつ荒れ狂うか知れないのよ。この前噴煙をまき散らしたときは大変だったわ。今日みたいに静かにしていてくれると、ほんとに美しいんだけど」

「そうね、本当に素晴らしい風景だわ。雨が降るとどんな風に見えるのかしら」

「わたし雨の日に船に乗ったこと無いのよね。ある人によると、霞の中に立つ姿が仁王の様で怖いそうよ。最近はずかだけど、何しろよく噴火するから。火砕流や降灰がある時は大変よ。前に2メートルもある石が降って来て鹿児島島のホテルの屋根を突き破ったことがあるのよ。兎に角

怖い山なのよ。でも美しい。昔ここに木^こ埜^{のは}花^な咲^さ椰^や媛^{ひめ}を祀った神社があって、その名前から桜島となったなんて話もあるのよ」

「ふうん。雨が降っているとき、甲板に出たりしたから木埜花咲椰姫尊の怒りに触れたのかな。それにしても木埜花咲椰姫尊は日本中どこにでも祀られているのね」

「えっ？」

祐子は白い波を見ていると、また賢のことを思い出した。賢を呼んでみようと思った。

「賢くーん」

祐子は声を張り上げて叫んだ。木霊が返って来た訳ではないのだが、祐子は自分が呼ばれているような気がした。

「賢くーん」

また、自分が呼ばれている感覚を覚えた。沙織は呆気にとられている。船内から数人の男女が甲板に顔を出た。何事が起きたかというような顔をしている。祐子はふっと息を吐いた。胸に自分を求めて呼び掛けてくるような感覚がする。賢だと思った。しかし次の瞬間、自分が只そう想像しているだけかも知れないという気がした。すると呼び掛けられている感覚は消えた。

夕方のコンパには祐子と同じ年代の男女10人が集った。祐子も参加したので女性が一人余った感じになった。祐子は沙織の隣の席に座った。お互いの自己紹介から始まったが、沙織の番になった時、沙織は祐子のことも一緒に紹介した。全員が興味津々な顔で見つめている。特に男性は祐子が美人なため、ひときわ興味を覚えたようだった。沙織の会社の同僚は女性3人に男性2人、相手方は大手の電機会社の社員で、反対に男性3人、女性2人だった。女性は特に美人ということもないが、10人並な顔立ちだった。男性はどちらかというとも臭い^{くじ}感じが強い。中に一人だけ面長の大人しい男性がいた。初めにあみだ籤^{くじ}で席を入れ替えた。男性と女性が交互になった。祐子は沙織とペアの形にさせてもらった。祐子の隣には筋肉隆々といった感じの身体の大きな、眉毛の濃い男性が座った。色黒で一風インド人の様な印象を受ける。男性は大木とい

う名前だった。その男性が向かい合った2つの横長テーブルの片側の端に着き、祐子は端から2番目の席だった。ビールで乾杯すると、少し堅い雰囲気は崩れてきた。隣の男性が祐子に

「東京からですか。僕も学生の頃東京に住んでいました。東京のどちらにお住まいですか？」

とかしこまって聞いた。

「今は青山に居ます。ほんの少し前まで、江東区にいたのですが」

「僕は国領のアパートにいたんですよ」

「そうですか。調布ですよ」

そう言いながら祐子は大木のグラスにビールを注いだ。

「もう5年も前のことですから、大分記憶も消えて来ましたが」

祐子は原智明のことを聴きたかった。

「あの一、大木さんはあの失踪事件の原智明さんのことご存じですか？」

急に話を逸らされたが、大木は平然と応じた。

「ぼくは別の部です。そこの鶴岡が同じ課です。あの事件に興味があるんですか？」

「はい、わたしはあの事件と今度起きた海上での失踪事件について調べに来たのです」

「へえー、雑誌社の人ですか？」

「いいえ、わたしの知り合いが今度の事件で失踪してしまったのです」

「本当ですか！・・・おい、鶴岡、今の話し聞いたか？」

隣の席の小柄でやせ気味な女性と話をしている鶴岡は静かな印象を与える男性だった。

「うん、今日もみんなで「今度の事件が起きた状況は原智明が失踪したときと似ているな」って話していたばかりだ。原の時も雨が降っていたし、それに・・・あいつも垂水に行くって言ってたんだ。会社を出てからのことは分からないけどな。あいつ天才的だったし、聴くところによると今度失踪した人達も優秀だったみたいだしな」

祐子は一体誰に賢や亜希子が優秀な人間なんて聴いたんだろうと思っ

た。でも、賢を悪く言っていないので悪い気はしなかった。隣の大木が
「祐子さんは今度失踪した人たちとどういう関係？」

と聞いた。

「仲のいい友達です」

「唯の友達？」

「わたしたち仲間だったのよ。いつも一緒に集まって行動している仲間」

「そうか、それは心配だよな」

鶴岡の方を向いて祐子が訪ねた。

「原さんが失踪する前のこと教えて頂けないかしら」

「どんなこと？」

「失踪前に原さんに何か変わったところがなかったか聴きたいのですが」

「どうしてそんなことに関心があるんですか？」

「わたくし達、失踪と意識の作用の関係を調べているんです。その結果、
変わった行動を取るってことも含めてですけど」

鶴岡は見かけによらず明快な話し方をした。

「意識と言えば、原もよく意識がどうのこうのと言っていたんですよ。
あいつはその割にぼーっとしていることが多くて、街で擦れ違ってもこ
っちに気付かないことがよくあったな」

「原さんはどんなことが好きだったんですか？」

「そうだな、特に何かに凝っているってことは無かったようだけど、変
わった物が好きだったな。それも電気製品や自動車みたいな人工的なも
のではなくて、動物とか植物とか自然にあるものに興味を持っていたみ
たいだな。よく、「人は具体的に考えることができれば何でも作れる。
だから人の作ったものはたいしたことがない」なんて言ってたな。意識
については「人は意識の重要性を忘れてる。意識で自分を創っている
のにな」なんて言ってたよ。前に俺のところに来て「鶴岡さん、この前
トカゲの卵を見つけたんです。それで飼ってみようと思って、3センチ
角の小さな入れ物を作って中に砂を入れて、その入れ物に卵を入れてお
いたんです。トカゲが孵化して生まれてきたんで、小さな虫なんかの餌

をやって育てていたんだけど、いつまで経っても小さいままで大きくな
らないんです。分りますか、これも意識の作用なんですよ。動物は感覚
と意識しかありませんから、感知した壁の内側を意識が自分の生きる領
域と決めてしまったんです。だから大きくなれないんです。動物は感覚
が意識と直結しているんですね」なんて言っていたよ。僕は「変なこと
を言う奴だな」って思ったのを覚えているよ」

その時、祐子と反対側の列の真ん中にいた髭のそり跡がはっきりと分か
る目のぎょろっとした男性が、

「さあ皆さん、ここで一つゲームをしませんか？」

と言った。皆あまり気が進まないような感じだ。誰も乗って来ないので
見て、

「じゃ、ひとつ皆で歌を歌いましょう」

と言った。この男性は電気会社の人間だ。

「小原節、いいかな。1、2で歌い始めてね。いち、に、花は霧島、煙
草は国分 燃えて上がるは オハラハー桜島 ヨイヨイヨイヤサット
見えた見えたよ 松原越しに 丸に十の字の オハラハー帆が見
えた ヨイヨイヨイヤサット 雨の降らんのに 草牟田川濁る 伊
敷原良の オハラハー化粧の水 ヨイヨイヨイヤサット」

電気会社の男が声を張り上げて掛け声を入れた。全員が手拍子を取りな
がら歌った。歌っている間に全員の意気が高揚してきた。今まであまり
話さなかった女性達がよくしゃべり出した。沙織もそれまで祐子達の話
に耳を傾けていたが、掛け声を掛けた男性に民謡のことを話題にして話
し掛けている。沙織と男性の話が途切れたとき、沙織が祐子に「一寸み
んなに原君のこと聞いてみるわね」と言った。沙織は声を強めて、

「みなさあん、一寸質問。誰かあの天才原智明君のことで、変わった話
を知っている人はありますか？」

原智明については全員が知っている様だった。祐子と同じ列の端にいる
大城美香が話し始めた。美香は原智明と同じ部署で働く背丈の大きい女
性である。話し方に抑揚があり全員を釘付けにした。

「わたし、面白いところを見たことがあるの。わたしが町はずれの民家

の建て込んだ坂道の上の方を歩いていた時だけど、坂を少し下ったところで原智明さんが、坂道を下って来た自転車いきなり体当たりしたの、自転車に乗っていたのは中学の女子生徒だったんだけど、いきなりぶつけられたから、ハンドルをブロック塀にぶつけて横倒しになってしまったの。彼女膝を擦りむいてしまったの。その子、半ベそをかきながら自転車を起こそうとしていたのね。わたしは坂道の上から駆け下りて、女生徒が自転車を起こすのを手伝ったわ。正直、原さんには憤慨していたの。そうしたら、坂を登って来た中学の男子生徒が3、4人集まって来て原さんに食って掛かったの。一人が突き飛ばすように原さんの胸を突いたわ。でも原さんは黙って男子生徒のするままになっていたの。その時、坂の下の交差点を爆音を轟かせた暴走族のような黒い車が猛スピードで横切ったのね。その音がブン・ブンと凄かったの、みんなびっくりしてそっちを見たのよ。そしたら、後ろの方の男子生徒が、「おい、佐藤よせ！今、彼女、危なかったんだぜ。もしこの人がむりやり彼女を止めなかったら、今頃は悲惨な事故になっていたぜ」と言ったのよ。その突っかかって行った男子生徒が「ばか、ブレーキ掛けりゃあどうってことねーよ」といったの。ところが、原さんが「この自転車、ブレーキの効きが悪い。あの自動車が交差点に入ると、この自転車が交差点に入るのが同時だったんだ」と言ったの。原さん、あの少し前に遠くにあの自動車の走っているところが見えたんだって。みんな「取って付けた屁理屈だ」って思ったのよ。そしたら、中学生の女の子が「わたしの自転車、ここのところブレーキの効きが悪いんです。この坂道はいつもは通らないんでそのことを忘れていました。今言われてぞっとしました」と言ったの、中学生の男子生徒達は、原智明さんに向かって口々に「すみませんでした」と言っていそいそとその場を離れたの。わたし、「どうしてそんなことが分かるの？」と聞いたのよ。そしたら、原さんが「計算した」って言うの。ねえみんな、信じられる？」皆、一言も喋らずに聞いていた。美香が「やっぱ、原君天才よね」と言うと、祐子の隣の大木が

「だけど瞬時に今走っている自動車や自転車のスピードを割り出して、現在いる場所から交差点までの距離を目測して、到着時間を計算するんだろう。原智明の頭の構造はどうなっているのかな」

と言い、美香の対面の男性が

「だけど、なぜブレーキが効かないって分ったのかな」

と言った。美香が

「わたしも不思議に思って訪ねたの。そしたら、原さん、「女生徒がずっとブレーキを掛けていたのを見ていた」と言っていたわ。ブレーキを掛けようとする意図が自転車に作用し切れていなかったって言ったわ。原さんが急に自転車に突進したのは自転車が暴走していると思ったからなのね。わたしには、自転車が特に暴走しているようには見えなかったんだけど」

皆それぞれに原智明の話をしていて、それらは何れも原智明に対する賞賛や疑問についての話だった。美香が再び話し始めた。

「原さん、居なくなった日は朝からそわそわしていたの。仕事をそっちのけでPCに向かって何か計算式を作っていたようなの。今日は来ないけど、昼近くになって主任の榊山さんが、「おまえ、何やってんだ」と言ったのよ。そうしたら彼、「榊山さん、もう仕事をしている場合じゃないんですよ」と応えたんです。勿論榊山主任は聞き捨てならぬとばかりに、「おまえな、会社から金もらってんだから働け」と幾分強い口調で言ったのよね。そうしたら原さんたら、「これで、世界が変わるから、結果的に会社のために働いているんですよ」と応えたのよ。流石に榊山主任も呆れてそれ以上何も言わなかったわ。それから30分ほどして原さん、「できた」と言ってPCの電源を切ると、行き先掲示板に外出って書いて、課長に「一寸業者に会いに外出してきます」って言って出て行こうとしたの。課長が「原、どこに行くんだ」って言うと、「垂水ですよ」と言ったの。課長はてっきり垂水にある垂水中央産業だと思ったから、「分かった」って言ったのよ。それっきり原さん戻って来なかったの。後で垂水中央産業に電話して確認したんだけど、原さんと会う約束なんか無かったみたい」

沙織が、

「原智明君のPCのデータ調べてみた？」

と聞いた。

「だめよ、データは全部暗号化されていて、分からないの。それに原さん、いつも「このデータは誤解を生む危険性がある。悪用されると、とんでもないことになるんだ」って言っていたから何となく不気味で。誰もそれ以上追求してないのよ」

それから暫くはそれぞれ自分の気に入った相手と話が進んでいたが、やがて2次会に向かうグループとそこで帰るグループに分かれた。沙織は祐子を伴って帰宅の途に就いた。ふたりは鹿児島中央駅から鹿児島本線で一つ目の駅上伊集院で降りた。沙織の家は駅から歩いて10分ほどの住宅街にあった。それほど大きくはないが、20坪ほどの庭を持つ2階建ての家で、沙織の母親が出迎えてくれた。沙織が既に話をしてあるようで、母親は

「祐子さんね。よくいらっしやったわね。さあどうぞ上がって」

と言った。沙織が母親と祐子を交互に紹介した。祐子は自分があまり酒を飲まなかったことにほっとして、

「初めまして、崎野祐子と申します。夜分お邪魔して、申し訳ありません」

と挨拶した。沙織は祐子を促して居間に入った。居間は8畳程度で、3人掛けのソファーとシングルソファー2つが中央に陣取っていた。シングルソファーに父親と思われるずんぐりとした50歳前後の男性が掛けていた。男性はやおら立ち上がると、にこにこしながら言った。

「いらっしやい」

「東京の祐子さんよ。祐子さん、こちらが父よ」

沙織がきちっと紹介をした。

「崎野祐子と申します。夜分遅くに申し訳ありません」

「祐子さん、ゆっくりして行ってね。鹿児島にはいつまでいらっしやるの？」

と母親が聴いた。

「1週間ほど滞在しようと思っています」

「そう、それじゃ、その間うちに泊まるといいわ。沙織、そうして頂きなさい」

「ありがとうございます」

きちんと片付いた綺麗な部屋だった。ふたりは暫くの間居間に居て、祐子が鹿児島に来た経緯などについて両親と会話してから、沙織が祐子を自分の部屋に案内した。沙織の部屋は2階にあった。2階には2部屋あり、沙織の部屋は突き当りの部屋だった。もう一つの部屋は2歳年上の兄の部屋とのことだった。沙織達の家族がここに引っ越して来たのは父親の転勤の時、今から6年前のことで、祐子達がまだ大学生の頃のことだった。大学を卒業すると祐子はそのまま東京の企業に就職したが、沙織は一旦自分の家に戻りそこで就職先を探した。大学を卒業した女子の就職口はほとんど無かったが、父親の会社の取引先の社長の紹介で地元の酒造会社に就職することができた。それも正規社員として採用されたので沙織は父親に対して尊敬と感謝の気持ちを一層強めた。元々父親に甘える娘だったので、家族から見ると特に変わった様子ではなかった。沙織の兄はどちらかと謂うと不活性な質で、電子技術関連の専門学校を卒業したが就職先が決まらず、フリーターでいた。時々アルバイトを見付けて来ては勤めていたが、2、3ヶ月で直ぐに辞めてしまい、また暫くは家に閉じ籠っているという生活を4年以上も続けている。両親は兄が専門学校を卒業したばかりの頃いろいろ就職先を探すのを手伝っていたが、本人に気力が無いのを知ると、暫く様子を見ようと決め込んで、特に強く叱ったり責めたりすることはしなかった。夜9時を回っている。沙織達が部屋に入ると、母親が紅茶とケーキを持って来た。沙織の部屋は7畳半の和室で畳の上にシングルベッドを置いてある。ベッドの横の畳の上に布団が一式用意されていた。祐子は心遣いに感謝した。ベッドの脇に小テーブルと椅子が2脚置いてあり、何となく畳の部屋にマッチしない感じだった。

「ベッドとテーブルはこの間買ったばかりよ。本当は洋室がいいんだけどね。なかなか言い出しにくくて」

沙織が言った。ふたりは母親の持って来てくれた紅茶を飲みながら一息ついた。

「明日は原智明さんの研究会に行ってみたいと思っているの。場所はこの近く？」

「うん、鹿児島市内にあるわ。ここが住所よ。ごめんね、明日はわたし会社休めないのよ」

そう言いながら沙織は予め用意していたと見られる手書きの簡単な地図で原智明研究会の事務所の場所を祐子に示した。城山という地名の住宅地の中にあるようだ。鹿児島中央駅から1キロ程度の距離とのことだった。沙織は祐子にベッドを与え、自分が畳の上に敷いた布団で寝た。翌朝起きるとふたりはすぐに着替えてから、1階の洗面所に降りて顔を洗った。タオルで顔を拭いている時、祐子は背後に背の高い男がぬっと立っているのに驚いた。

「お兄ちゃん、おはよう。今日は早いじゃないの。一寸悪いけどもう少し待ってて」

「おはようございます」

祐子も挨拶した。

「おはよう。沙織、友達？」

「友達の祐子さんよ。祐子さん、お兄ちゃんよ」

兄は「よろしく」と言った。祐子は幾分緊張した。洗面所は2人入ると一杯で、これ以上人に入る余地は無い。祐子は急いでタオルと歯ブラシを手にする時、「お先に済みません」と言って洗面所から出た。兄は興味深そうに祐子を見つめている。この朝の祐子の姿には瑞々しさと、弾けるような輝きがあった。祐子は沙織の家族の中に入り込んでいることに多少の戸惑いを感じた。寝起きの顔を知らない男性に見せるのは何となく恥かしかった。やはりホテルに泊まろうと思った。祐子は沙織の部屋に戻ると急いで荷物をまとめ、トラベルバッグを持参して階下に降りた。沙織は既に着替えを済ませて席に着かずに祐子を待っていた。祐子がダイニングルームに入って

「おはようございます」

と言うと父親が

「休まったかな？」

と言った。祐子は沙織に促されて席に着いた。

「はい、ありがとうございます」

沙織の兄も既に席に着いている。食卓には家族全員が揃った。

「お兄ちゃん、珍しいじゃない。みんなと一緒に朝ご飯するなんて、何ヶ月ぶり？」

母親は食事をテーブルに並べながら微笑んでいる。

「いいじゃないか」

沙織の兄はやはり祐子を意識しているようだった。食事をしながら母親が祐子の予定を聴いた。もっと泊まってゆくように促す両親に礼を言って、少し遠くに移動するかも知れないとの理由で^{いとま}暇することにした。食事を済ますと少しして、祐子は沙織と共に家を出た。出がけに何度も礼を言った。両親が玄関で見送ってくれた。玄関を出る時、兄が居間のドアを開けて覗いているのが分った。ふたりは電車で鹿児島中央駅まで行ってそこで分かれた。沙織が「夕方また会おう」と言った。ふたりは午後6時にスマホで連絡を取り合うことにした。

駅に着くと祐子はトラベルバッグからノートとペンを取り出してハンドバッグに入れた後、トラベルバッグをコインロッカーに預け、駅の旅館案内でホテルの予約をした。垂水に宿泊したかった。幸い垂水の温泉ホテル江陽館に空室があった。祐子はそこを予約してから、鹿児島埠頭に行った。海を見たかった。いつの間にか賢のことが頭を占領していた。無性に賢に会いたかった。鹿児島埠頭に着くと祐子はじっと海を見つめた。丁度フェリーが着岸していた。フェリーの乗り場は観光センターのような造りになっていて、待合室の前に土産物店が並んでいる。祐子はビルの建物を出て栈橋に入る脇の岸に佇み、着岸したフェリーから降りて来る人々を見ていた。知らない内に降船客の中に賢の姿を求めた。賢が降りて来るはずもない。全員が降りてしまうと、また空虚な感覚に包まれた。ふと祐子は自分が誰かに見られている気がした。振り向いてみたが人影は無かった。桜島が静かに鎮座している。今日も暑くなりそう

だと思った。祐子は中央駅に戻ることにした。夕方もう一度ここに来ることになる。賢と亜希子が消えたことなど、祐子意外にもう誰も意識していないようだった。祐子は中央駅に戻った。途中にある鹿児島中央署に寄ってその後の経過を聴いた。進展は無かった。前回訪れたときからあまり調査をしていないのではないかと思われたが、祐子は「よろしくお願ひ致します」と頼んだ。心からそう思ったのだ。本当に何とか見つけ出して欲しかった。祐子は中央署を出ると涙ぐんだ。どうやって賢を探せばいいのか皆目見当も付かなかった。9時半を回っていた。祐子は沙織に教えてもらった住所と簡単な地図を頼りに研究会のあるという城山町に向かった。市内電車が走っていたが、どこで降りたらよいかも分からないため歩いてゆくことにした。日差しが強くなってきていた。陽光がビルに遮られた場所を通ると、再び誰かに追跡られているという感じがした。振り向いても誰も居ない。祐子は錯覚かと思った。研究会の事務所は市役所や美術館のある市の行政区にあるマンションの5階にあった。表札などは無く、ただ入り口のドアに写真のL版程度の大きさの白地に黒の明朝体で原智明研究会と印刷された紙が貼られているだけだった。その紙が無ければ普通の住居の入り口とってしまうほどだ。祐子が呼びリンを鳴らすと、60歳過ぎに見える男性がドアを半分ほど開けて顔を出した。

「どなた？」

「はい、崎野祐子と申します。東京から参りました。以前こちらに伺った数馬さんの知り合いの者です」

「ああ、あのビジネスマンの樋口数馬さんとね。あんたも研究会に興味があるとか？」

「はい、お話を伺わせて頂きたいと思ひまして」

「まだ誰もおらんじゃど。働いている人がほとんどなんで夕方にならんと人が集まらんじゃが」

「はい、でも原智明さんについていろいろな情報をお持ちだと聞きまして、是非一度伺いたいと思ひました」

「そげんや。だども誰もおらんじゃが・・・」

そう言いながら男性はドアを大きく開けて「どうぞ」と言った。入り口を入ると半畳ほどの土間がありすぐに廊下になっている。祐子は「失礼します」と言って中に入った。奥が20畳ほどの居間の様になっており、そこに3人掛けのソファが2脚置いてあった。センターテーブルの横にはマガジンラックがあり、その中に何冊かの小冊子が挟んである。部屋の片隅に書きものができる机と半間幅で高さ2メートルほどの書棚が置いてあり、科学雑誌や天文関係の書籍、生物学の書籍、哲学書などが無造作に放り込まれていた。その間に何冊かのファイルが立て掛けられている。それらのファイルに祐子の意識は惹き付けられた。居間は別の部屋に繋がっていて、そこが厨房のようになっていた。男性は厨房に入ると麦茶の入ったグラスを2つ持って来てセンターテーブルに置いた。

「東京にも事務所があるんです」

「はい、一度伺わせて頂きました。そこで原智明さんの語録のコピーを頂きました」

「じゃっとな（そうですか）、で、何故わざわざ鹿児島まで来たんとかね？」

祐子は賢と亜希子がここに調査に来てそのまま行方不明になったことを説明した。そして、原智明の消滅も賢達の消滅と同じ線上で考えることができそうだと説明した。男性はやっと納得がいったという顔をした。

「申し遅れたが、おいは馬場と謂いもす。ところで、原智明語録の中に感動した言葉があるんとね。それとも失踪のことだけを調べていると？」

「わたしも感銘を受けた言葉があります。「愛を持って、死を成就できれば、一応生きた証になる」という言葉です。この言葉にはわたしより、この間失踪した内観さんの方がもっと強く惹かれていました。わたしには、ただ何となく、この言葉を聞くと生気が漲ってくる感じがするのですが、内観さんはこの言葉から人間の生きる目的のような印象を感じ取ったようです。そのほかにも意味深い言葉が多くあるように思いま

す」

「じゃっとな。ほんのこち、おいも幾つかの言葉に心が揺さぶられたんじゃが、今の言葉もじゃど、そんなの一つじゃが。おいがここで留守役を受け持っているのも、残された時間を原智明の研究に費やしたいからで、家におったら日常茶飯事に追われてこの肉体を保つことにのみ命を使うことになってしまうんじゃで。誰もいないときは瞑想ができてなかなか良か」

「もうお仕事はリタイヤされたのですか？」

「うん、去年な。わい(あんた)は若いのに何もしていないとね」

祐子は少し批判的なことを言っているのかと思ったが、馬場の話しのトーンはソフトでそれを感じさせない。

「わたしは、内観賢さんと藤代亜希子さん—この間失踪したふたりですが—その人達を見つけ出すために、つい先日会社を辞めたばかりです。このふたりはわたしたち親友グループの無二の仲間なのです。ふたりを捜すのに自分の全てを賭けることにしたのです」

「ほう、ほんのこて殊勝なこつ。こげん真剣なら一つ面白いもん見せんとな」

そう言うと馬場は書棚から表紙に何も書いてないA4サイズのファイルを取り出した。そして祐子の腰掛けている隣に座った。そのファイルをセンターテーブルの上に置いて広げると、それが写真アルバムになっていることが分かった。そのアルバムには原智明の写真が貼ってあり、それぞれの写真ごとに説明書きがあった。祐子は馬場が写真の説明をするときに身体を自分の方に寄せて来るのが気になったが、少し離れるようにしながらアルバムを覗き込んだ。原智明は想像していたイメージとは遠く掛け離れていた。学者肌の眼鏡を掛けた男性を想像していたが、写真に写っている原智明は童顔の小柄な男性で、眼鏡も掛けていなかった。まるで漫画に出て来るような目の大きな少年というイメージだった。馬場は方言交じりの話し方を止めた。

「これが、指宿の砂を掘っている時の写真、同僚が面白がって撮ったんだな。これが、仕事中にパソコンを操作している時の写真。こっちを見

てごらん。これは同じ部の女性にからかわれたときの写真。彼は純情だったんだな。この女性にこんな風に腿に触られて、真っ赤になったところを同僚に撮られたんだ」

そう言いながら馬場は祐子の腿に触れた。祐子はドキッとして咄嗟に立ち上がった。

「まあ、そんなに逃げなくても大丈夫だよ」

祐子はここが密室になっていることを初めて意識した。馬場とふたりきりなのだ。馬場は平気な顔で、

「この次のページはもっと面白いぞ」

と言った。祐子は一旦立ち去った方がよいと思った。その時入り口のドアが開いて、

「親父さんいるかい」

と言いながら30歳前後の男性が入って来た。

「おや、橘さんか？随分早いな」

祐子は助かったと思ったが、今現れた男性に対しても警戒心が沸いて来た。

「おじゃましています。初めまして、わたしは東京から来た崎野祐子と申します」

「おや、あなた昨日フェリーに乗っていませんでしたか？あなたによく似た人を見掛けましたが」

「はい、乗りました。実はこちらに伺ったのも、この間のフェリー上での失踪事件を調べるのが主な目的なのです」

「そうでしたか。申し遅れましたがわたしは橘と申します。高校の教諭をしています。原智明さんの失踪が、今度のフェリーでの内観さんと藤代さんの失踪と関連があるのではないかと思ひまして、昨日も確認の意味でフェリーに乗って垂水まで行って見たのです。あなたは、内観さんか藤代さんの知り合いですか？」

祐子は自分とふたりの関係を説明した。

「そうでしたか。それでは我々と一緒に調査をしませんか？」

「えっ？原智明さんの語録を研究しているのではないのですか？」

「それもやりますが、我々は肝心の原智明さんを見つけ出そうと必死なのです。今のところあまり有力な手掛りはありませんが、おふたりの失踪との共通点を探し出そうとしています」

祐子は嬉しくなってきた。さっき馬場のとった不遜な態度が消し飛んだような気がした。橘は

「崎野さんでしたね。あなたのような美しい方が、こんなむさ苦しいところに馬場さんとふたりきりでいてはいけません。馬場さんに変なことされませんでしたか？」

馬場は少しむくれて

「おいおい、変なことを言うなよ」

と言った。しかし、それ以上反論しなかった。

「崎野さん、馬場さんは去年退職すると同時に奥さんを亡くされて、今は少し寂しがり屋になっていますから気を付けた方がいいですよ。はっはっは」

橘は高笑いをした。センターテーブルに広げられているアルバムを見て「崎野さん、写真を見ましたか？なかなか面白いでしょう。原智明さんの一面を伺うことができます。特に彼の計算能力は普通の人間には考えられない程凄かったですよ。自動車の走行スピードやスーパーでバルク販売している山に積まれた果物の数なんかを瞬時に計算したり、数えたりできたんですよ。よくテレビのバラエティ番組で紹介している暗算の天才とか数の記憶の天才とか呼ばれている人たちなんて問題になりませんね」

「昨日わたしも、原智明さんが自転車に乗った女子生徒が自動車と衝突するのを瞬時に予測して、わざと自転車にぶつかった話を聞きました。ビックリしましたわ」

「そう、その話もこの研究会で一時話題になりました。警察に表彰してもらった方がいいなんていう話まで出ましたが、何せ誰にも分からないことですからそのままやむやになってしまっ」

「でも、わたしもこういう話は表彰したり、新聞に載せたりした方がいいと思います。昔わたしが小学3年生の時、同級生で“善行賞”という

表彰を受けた子がいました。善行賞というのは良い行いをした生徒を学校が表彰する制度で、その子は近くにある鉄道の踏切の線路上で遊んでいた幼児を抱き上げて安全な場所に移動させたんです。そのすぐ後、列車が通過しました。遠くでそれを見ていた大人が、小学校に報告して表彰されることになったんです。その時わしたち同級生は、「自分もこんな良い行いができないか」といつも意識を善い行いに向けていたのを覚えています。今の世の中の動きを見ると、普通の人のはたとえ目で人が事故に遭うような悲惨な状況に直面しようと、「あぶないなあ」ぐらいの感覚しか持たなくなってしまうと思うのです。原智明さんの凄いところは計算能力もさることながら、瞬時に女子生徒を救う行動に出ているところだと思うんです。表彰や新聞発表で鈍感な人の意識を活性化できるんじゃないかと思います」

それを聞いていた馬場は

「そうだね、本当にそう思うよ」

と幾分媚びを売るように言ったが、祐子はそれを無視した。橘が

「崎野さん、あなた内観さんと藤代さんを探しておいでなのでしょう。

よろしければ、わたしたちも協力しますよ」

と言った。

「それは助かります。わたしは一人で調査を続けるつもりでいたので、心細かったのです。皆様のご協力が得られればどんなに心強いことか」

「それでは、今までのことを少しお話しします。馬場さん、崎野さんにはどの辺まで話されましたか？」

と言いながら橘は馬場の方を向いた。

「原智明語録のことと、写真だけだよ」

馬場は心なしか気落ちしたように応えた。

「それじゃあ、まず原智明さんの件からレビューしてみよう」

橘はそう言うと書棚から1冊のファイルを取り出した。そのファイルには「原智明失踪調査」とタイトルが打ってある。祐子の心は躍った。橘が馬場と反対側のソファに腰掛けると、祐子は回り込んで橘の隣に少

し間隔を開けて座った。座ってから直ぐ、少し出ている膝頭が馬場の方に向かないように足を斜めにした。ノートには原智明の性格、趣味、家族構成、その他考えられるありとあらゆる個人情報にぎっしり書き込まれている。更にページを繰ってゆくと原智明の数学の能力についての記述、次にページを繰ると自然科学に関する能力の記述、哲学に関する記述、社会に関する記述、運動に関する記述、音楽に関する記述、詩に関する記述、絵画に関する記述、ダンスに関する記述、人間に関する記述と続いていた。人間に関する記述は10ページにも及んでいた。それから1ページ開けて〈失踪事件追跡〉とタイトルが打っており、「失踪前の原智明の状態と、置かれていた環境、失踪後に起きた現象」と記載があった。どの項目も説明は途中までで、多くの空白が残されている。最後に〈考察〉とタイトルが付いていて、何度も消して書き直した形跡が窺えたが、「原智明は多分生存している。何かの事情があって一時身を隠しているのだと思われる」と記入されていた。祐子は橘に向かって聞いた。「音楽とか絵画とか詩とかダンスとか、これは原智明さんの趣味ですか？」

「うん、どうかな。趣味と言うべきなのかな。原智明さんはそれに全力投入していたようなんだ」

「特にダンスというのがしっくりきませんが」

「原智明さんも普通の人と同じようにいろいろなことに興味を持っていたんだな。旧イスラム教の教徒にスーフィーという人たちがいるのを知っていますか？」

「ええ、名前は知っています」

「あの人たちの踊るダンスを見たり踊ったりするのが好きだったようです。くるくる回ったり、あるリズムで決まったパターンの踊りを繰り返したりするダンスなんです。そうそう、原智明さんが踊っている写真がアルバムにありますよ」

橘は広げてあるアルバムを手前に引いて向きを変え祐子の前に置くと、3ページほど繰って1枚の写真を指さした。その写真は原智明が右手首を上、左手首を下に折り曲げ、両腕を広げて立っている写真だった。

「これは回転している写真だよ。これもスーフィーのダンスの一つなんだって」

「それにしても、よくこんなに多くの写真や資料を手に入れることが出来ましたね」

「彼は幼い頃両親を亡くし、姉弟、親戚も無く孤児の施設で育った天涯孤独な人で、警察が失踪と決めた後でアパートが引き払われ、所持品の整理が行われたのです。それをここの研究会で預かることにしたのです。ここにある資料はすべて複製です。実物は奥の収納棚に納めてあります」

「そうだったんですか。道理で資料が豊富だと思いました。ところで、詩や絵画も原智明さんの趣味なんですか？」

「これも趣味と言っていていいかどうか。「詩や絵画は創造—クリエイション—だけど—それを体験する為に描く」と言っていたな」

橘は祐子の顔が近付いているのを意識した。祐子の輝くような美しさが眩しく感じられ、心が揺れた。

「崎野さん、一緒に食事に出ませんか？」

「はい、おじゃまにならなければ」

「よかった。それじゃあ一旦外に出ましょう。ところで、馬場さんはどうしますか？」

馬場はそれまで黙ってふたりの会話を聞いていたが、ぽつりと言った。

「僕は遠慮しとくよ。コンビニの弁当を買ってあるから」

ふたりは事務所を出て、近くのイタリアンレストランに入った。祐子は事務所の中にいた時にはファイルにばかり気を取られ気付かなかったが、外に出ると橘の顔立は彫りが深く、背の高い好青年だということを知った。食事をしながら祐子は橘に直接的な質問をした。

「橘さん、高校では何を教えていらっしゃるのですか？」

「生物です。今は夏休みで、暇でね。受験第一主義の高校では一寸マイナかな」

「マイナなんてことはないと思います。ところでどうして原智明さんの研究会に入ったのですか？」

「彼がDNAについていろいろ言っているということを知ったからで、今まで疑問に思っていたことが氷解するのではないかと思ったからなんですよ。一人でよく山に入ったり海に行ったりして自然の生物を調べているんですが、何と謂うか、人間の遺伝子の不思議はもう言葉で表現できる範囲を超えています」

「おひとりで出掛けるのですか？」

「はい、橘は28歳の独身であります。ただいま花嫁募集中であります」橘は少しふざけて応えた。花嫁募集中と言う時に少し微笑んで祐子を見つめた。祐子は橘から視線を外した。今度は橘が

「崎野さんは恋人がいますか？」

と聞いた。

「はい、おります」

祐子はきっぱりと答えた。橘は祐子の目を見て微笑んだ。祐子は目を伏せた。レストランの支払い橘がした。レストランを出ると橘は何度も振り返りながら祐子を駐車場まで案内し、自分の車の助手席に乗せてそこを出た。食事をしながらふたりはもう一度フェリーで垂水に行ってみることに決めていた。垂水は原智明と賢達が失踪した時の行き先で、最も分かりやすい共通点だ。祐子は自分一人ではどうにもならない探索が、橘と一緒にすることでずっと進展しそうな気がした。乗用車をドックに入れるとふたりは車を降りて一度船室に向かい、そのまま船室を通り貫けて甲板に出た。甲板はそれほど広くなく、手すりの位置も低いので、祐子はデッキから外を眺めるのにも多少勇気が要ると思った。ここに賢と亜希子が立っていた。祐子の胸に賢の面影が映った。ふたりがなぜ履き物を脱いだのか分かったような気がした。もし雨が降っていたら、ここを歩くのは危険と感じたに相違ない。それなら何故雨のデッキに出たのか？その理由が依然としてはっきりしなかった。

「なぜ、雨の中でデッキに出たのでしょうかね」

橘が言った。橘も同じことを考えていたようだ。

「週間インシデントに載っていた、「内観さんと藤代さんが心中した」という可能性はあるのですか？」

「いいえ、それは絶対ありません」

「凄い確信ですね」

「わたしはふたりの親友です。ふたりのことはよく知っています」

先ほど事務所で橘に説明したことを繰り返した。垂希子のことを妹と言わずに親友と言った自分の気持ちを「少し歪んでいる」と思った。橘は祐子の心の壁がかなり厚いと感じた。

「そうだとすると、原智明さんと内観さん達の動機を共通と仮定してみた場合、いずれも突然垂水に行こうとしていること、つまり誰にも垂水に行く理由を説明していないこと、しかしいずれも垂水には着いていないこと、これは警察が調査したことだけど、その点が共通だということになるんだな。それに、原さんもどうやらフェリーに乗っていたようなんだ。というのは、垂水の北の荒崎の海岸に原さんのものと思われる靴が片方打ち上げられているんだ。しかし、誰もそれが原さんのものだと断言できなかったんで確証物件にできなかったんだ。原さんの会社の同僚がどうも原さんの靴らしいと言ったことと、以前懇親会の時に撮った写真に写っている原さんの靴に似ていたので、そうじゃないかということになったんだけどね。だから、2つの事件は同じような原因で起きたかも知れないんだ」

祐子は驚いた。もし原も海上で消息を絶ったとすると推察の方向が絞られてくる。

「だけど、鹿児島からだと垂水まではフェリーで行った方が早いし、安いんだから、フェリーを使うのは当然と言えば当然なんだよね。分からないのは内観さん達がフェリーを使った必然性なんだな。レンタカーで空港から垂水に行くんだったら、わざわざフェリーに乗るかな」

「もしかすると、内観さん達は鹿児島から指宿までフェリーで行くつもりだったんじゃないかしら、だけどフェリーの直行便がないので、一旦垂水迄行ってそれから垂水から少し下って、錦江町から指宿港に行こうとした……一寸無理があるわね。頭のいい内観さんが考えることじゃないわ。それなら、国道で直接指宿まで行っているはずですね」

「僕はね、多分鹿児島埠頭で誰かに垂水に行くように言われたんじゃないな

いかと思うんだ」

その言葉で祐子に考えが閃いた。

「分かったわ、きつこうよ。内観さん達は鹿児島埠頭まで来て、指宿への直行便が無いのを知った。それで、フェリーを使うのを止めようとしたけど、誰かに原さんがこの海の上で失踪した可能性があると聞いた。それで、ここまで来ているのだからフェリーに乗ってみようと考えた。一度垂水で降りてからは、さっき話したコースで指宿に向かうつもりだった。フェリーの中で、ふたりは原さんが失踪した時の状況を考えようと思って甲板に出ようとした。でも雨が降っていて危険だと思ったので、滑り易い靴を脱いでデッキに出た。そして、原智明さんと同じように失踪した。失踪そのものについては分からないけど、こう考えると全体の辻褃が合うわ」

「なるほど、祐子さん・・・祐子さんと呼ばせてください、頭が切れるね。きつとそういうことだろう。しかしひとつ分からないのは、原さんがなぜ垂水に行くと言って出たかということだ。垂水で特に際立っているのは、くぬぎばる 柗原貝塚とラジュウム温泉かな。どっちも直接失踪に結び付きそうもないけど・・・祐子さん、今日これから特に予定が無ければ柗原貝塚に行ってみましょうか？もしかしたら失踪となんらかの関連性があるのかも知れないし」

「はい、是非連れて行ってください。わたしはその為にここに来ていますから、どんな小さな可能性も無視できません」

ふたりは海の上を見つめた。何度考えても原智明も賢達も海に落ちたとは思えなかった。船が垂水埠頭に近付いたのでふたりはドックの車に戻った。橋は一度柗原貝塚を訪れていたもので10分ほどで目的地に着いた。農道を走って行くと路肩が整備されたような一角に出た。そこが柗原貝塚だと橋が言った。しかし発掘された貝塚の跡は埋め戻されて跡形もなくなっていて、特に管理もされておらず標柱が設けられているだけだった。

「貝塚はこの道路の下にあるんだ。ここからは使い道の分からない軽石の岩偶が出土しているんだ。結構珍しいようだよ。3、4千年も前の人

骨も出ているんだ。その人骨は犬歯が抜かれているんだって。なぜかな？しかし貝塚と失踪が関係しているのかな」

「詳しいですね。3、4千年というと縄文時代ですか？」

「縄文の後期だね。この地域は桜島の噴火の噴塵の影響と多分ラジュウムの影響があるから、貝塚で発見された生物はその保存性が良くて学術的にも貴重なんだ。発掘された軽石の岩偶の中には30センチ位あるものもあったんだ。僕はね、考古学にはあまり詳しくないけど、この地域の人たちが自然の中でどんな形で生きてきたかに興味があつてね、前に一寸貝塚なんかを調べたことがあるんだ。犬を埋葬していたような形跡もあつたりして、縄文時代の人間の精神性は今より高かったのかも知れない。これは生物学というより社会学に近いかな」

祐子は橘がどこか賢に似ていると感じたが、どうやら学際的なところだろうと結論付けた。ふたりは車から降りて標柱の近辺を歩いてみた。

「ここの縄文人は船でいろいろな地域と交流していたようだよ。鹿児島地域にはこんな貝塚がいくつかあるけど、どうやらここが中心的な役割を果たしていたようだ」

そう言いながら、橘は一本のシオンの花を摘んで祐子に渡しなが

「こういう花も昔から咲いていたのかな。ずっと長い歴史を子孫から子孫に命を繋いできたのかも知れないな」

と独り言のように呟いた。祐子は賢がよく、「生命は永遠に続く」と言っていたのを思い出した。勿論賢の言っている生命の意味はちょっと違っていると思ったが、祐子は橘に対して少なからぬ好感を覚えた。農道から国道220号線の佐多街道に出ると

「ここからの海を見てみたいわ」

と祐子が言った。橘は直ぐに民家の間を抜けて海岸線に出ると、車を路肩に停めてから祐子に言った。

「ここで降りてみましょう」

ふたりは海岸に出た。砂の上を歩く時橘が祐子の手を引こうとしたが、祐子は遠慮して、よろけながら波打ち際まで進んだ。海には桜島が浮いている。こちらから見る御岳は稜線が柔らかく鹿児島から見た姿より優

しい姿に見える。祐子は暫くじっと海を見つめていた。心の中で「あなた、どこにいるの」と叫んでみた。賢の笑っている顔が眼前に浮かんできた。「あなた、戻って来て」ともう一度心で叫んだ。いつしか祐子の目に涙が浮かんできた。橘はそんな祐子の姿をじっと見つめていた。暫く波打ち際に佇んでいると、遠くに一艘の手漕ぎボートが見えた。「誰かが手を振っている」と祐子は思った。何となく嬉しくなって、祐子も応える様に手を振った。ボートが少し近づいて来るように思える。ボートには黄色いシャツを着た人が乗っている。ふたりがじっと見つめていると、ボートは見る見る近付いて海岸から10メートルほどのところまで来て止まった。波の影響を全く受けず、まるで空中に浮いているかのように静止している。祐子は驚いた。それは海の老人だった。「なぜここに海の老人が居るんだろう」と思った。海の老人が言った。

「祐子だったね。儂のことを覚えているかね」

「はい」

「君は橘君だな」

「えっ、どうして僕のことを知っているんですか？」

「君がそこにいるからだよ」

「……………」

「祐子、いくらこの辺りを探しても賢や亜希子には会えないよ。勿論原智明にもだ」

「えっ、どうしてそんなことが分かるんですか？」

「ここにも入り口があるんだ」

「なんの入り口ですか？」

橘が聞いた。

「今君に話しても、多分分からない」

「……………」

祐子が必死になって言った。

「どうしたら賢くんや亜希子さんは戻って来るのでしょうか？」

それには応えずに海の老人は言った。

「君たちはいつも選択して生きている。そしてその選択の結果がすぐに

現れるときと、暫くしてから現れるときがある。しかし、君たちの選択はほとんどが確実なものでなく、中途半端なんだ。だから望んだ通りの結果にならない。祐子、同調するためには95パーセントではだめだ。時間が掛かり過ぎる。それから橘君、君は見えないものの中に真実が隠れていることに早く気付くことだ」

そう言うと、海の老人は櫓を漕いだ。2、3漕ぎすると、あっという間に沖に見えなくなった。ふたりは暫く呆然としていた。

「祐子さん、あの人は誰ですか？」

「わたしも、あの方がどなたか知りません。でも、時々わたしたちの前に現れるんです。わたしはこれで3度目です。いつも意味深いことを教えてくださいます。内観さんが「まるで月光仮面のような人だ」と言っていました」

「月光仮面？」

「昔の映画のヒーローです。「疾風はやてのように現れて、疾風のように去ってゆく」って映画の主題歌の中にあっただようですよ」

「確かに、どうしてあんなに素早く船を漕げるのかと不思議だな。それに、どうして僕のこと知っているのかな。「見えないものの中に真実が隠れていることに早く気付くことだ」って言っていたけど、ゲノムの挙動を見ているとそんな感じを覚えるんですよ」

「わたしは、同調という言葉と95%ということがよく分からなかったんです」

「祐子さん、もしかして、内観さんのことを好きなんじゃないですか？あの老人は「95%好きじゃだめだ」って言っていたように思えたけど」

「はい、実は・・・わたしたちは親友以上なのです。本当はこのことは口にしてはいけないことになっているんです。橘さん、誰にも言わないでくださいね。わたしは、もし彼が戻って来なかったら彼の後を追います」

「そうじゃないかと思いました。でも、藤代亜希子さんとはどういう関係ですか？」

「彼女も多分内観さんを慕っていると思います。彼は優しいから・・・

・それに・・・」

祐子は目に涙が溢れ出るのを覚えた。

「・・・・内観さんが以前、亜希子さんの命を救ったことがあるのです」
祐子は賢を思い出した。もう頭が賢のことで一杯になってきた。祐子は橘の前にも拘わらず啜り上げて泣いた。橘がハンカチを渡そうとしたが、祐子は首を振り手の甲で涙を拭った。

ホテルに向かう車の中で祐子は、

「できれば明日もう一度研究会に伺って、そこで今日の続きのお話を伺いたいです」

と言った。橘は承知した。そして、

「研究会にはいろいろな人が集まっています。純粋な人ばかりじゃないから気を付けて」

と付け加えた。祐子は馬場のことを言っているのだと思った。翌日は午前10時に事務所で会うことにした。それ以前に行くともた馬場とふたりきりになると思い、今朝の不遜な行動が思い起こされてその記憶を振り払うように首を振った。

ホテルに着くと橘は祐子を降ろし、霧島の自分の住まいに戻ると言って左手を挙げて会釈し、ゆっくり走り去った。祐子はすぐにホテルのチェックインを済ませた。

ふと、エントランスに目をやると、扉から少し入ったところでこちらを凝視している男の視線と出会った。祐子は「おやっ」と思った。沙織の兄だった。しかし、まだ4時半だ。沙織と会う約束は6時のはずだ。祐子が振り向くと、沙織の兄はちょこっと頭を下げて逃げるようにエントランスから出て行った。祐子はしっくりしない感覚を覚えた。部屋は普通の旅館の造りになっていたが少し狭く感じた。窓からは海を一望の下に望むことができ、桜島が彼方に見える。山々の峰に繋がり、海の中にある島とは思えない。先ほど近くに見た桜島を遠方から眺めると、空間の作り出す時間的隔たりに不思議な安心感を覚えた。祐子はすぐにシャワーを浴びて衣服を着替えた。それから座卓の上に2冊のノートを広げた。1冊は原智明語録、もう1冊は失踪事件調査ノートだ。その第7

のケースのページを開き、今日明らかになった内容をまとめ始めた。
〈事件の概要〉欄には既に失踪の日付と「鹿児島市内の池永光学株式会社に勤務していた原智明が会社の事務所でパソコンを操作して何かの計算式を作成していたが、突然「できた」と言ってパソコンの電源を切り、「垂水に行く」と告げて会社を出たきりそのまま失踪した」という説明文が書いてある。祐子は次の〈調査項目〉の内、

1. 人間関係 の欄に次のように書き足した。

「幼い頃両親を亡くし、孤児の施設で育つ。天才的なタイプのため、友人ができにくかった。施設を卒業後奨学金を得て大学に進学し現在の会社に就職した。あまり目立たない性格のためそこでも友人は少なかったが、敵対する人は全く無い。次第に多くの人々の尊敬を集めるようになる一方、会社では奇異な存在とも見られている」

祐子は自分と同じような孤独な人なのだと思った。

2. 地域情報 ここには既に霧島の高千穂地域のことと桜島のこと書かれている。

3. 周囲環境情報 の欄に

「亜熱帯の地域。桜島の噴塵の影響で、貝塚などの遺跡から原形が良く保存された発掘品が発見されるようなカルシウムが多い土地。桜島は地元では御岳と呼ばれ、畏怖の対象になっている」と記入した。

4. エントロピー この欄は祐子にはよく分からなかったが、多分複雑さの度合いだと考え、

「穏やかな雰囲気のある地域。東京のような煩雑さは見られない。その中でも特に原智明は物事の原理を知っていて、単純な原点に回帰する方向にあったと思える」と書き込んだ。

5. 物質的側面 は

「物証的なものとしては、原智明のものと思われる右靴（未確認）が垂水の海岸で発見されている」と書いた。

6. 精神的側面 の欄には

既に「原智明は高い精神性を有する。常人を超えた真理を会得しているものと思われる」と書いてある。祐子はそこに「スーフィーのダンスと

詩や唄を好む」と加筆した。

それ以降は 7. 時間的側面、8. 空間的側面、9. 意識的側面 と続くが、祐子は

8. 空間的側面 の項目に

「この空間を探しても原智明は発見できない。(海の老人談)」と書き込んだ。

10. 判断 として「原智明は生存している模様」と記入した。

<考察> は

賢が既に「この事件がすべての問題を解決する鍵を有しているように思える」と記入してある。祐子はそこに「祐子、橘：20XX年X月xx日、海の老人と遭遇」と追記した。

そしてページを繰ると第11のケースの「賢と亜希子の鹿児島での失踪」のページを広げた。

先ず、最後の10. 判断の欄に「賢と亜希子は生存している」と書き込んでから、<事件の概要>欄に戻り、

「賢と亜希子が、20XX年X月XX日午後5時頃原智明さんの失踪事件調査のため鹿児島に旅行した。鹿児島埠頭から垂水に向かうフェリーの中で二人は失踪した」と書いた。

次の<調査項目>は、

1. 人間関係 の欄に次のように書いた。

「賢は人間的に非常に優れた理想的な男性。多くの人が彼に惹かれている。両親はアメリカに在住。亜希子は純粋な女性。その純粋さ故あまり友人がいない。家庭は裕福で父親は東領製作所の社長。礼儀作法は完璧」

2. 地域情報 と 3. 周囲環境情報 には第7のケースと同様と書いた。

4. エントロピーの欄には

「賢、亜希子ともエントロピーの拡大は無いと思われる。むしろ縮小している」と書き込んだ。

5. 物質的側面

「物証的なものとしては、鹿児島湾の桜島付近の海上で二人のものと思われる麦わら帽子が発見され、二人の乗ったフェリー上で二人の履き物

が発見されている」と書き、

6. 精神的側面 の欄には

「賢は高い精神性を有する。常人を超えた真理を会得しているものと思われる」と書いて、祐子はこれが原智明の説明と同じだと思い、賢が如何に秀でているかを思い起こして自ずから微笑んだ。祐子はそこに「亜希子は苦しむ人を救いたいという願望があり、高い精神性を有する」と書き足した。

7. 時間的側面 の欄には

「指宿に宿泊する予定であったが、わざわざフェリーで垂水に向かったことが時間効率の点からも不可解。原智明の事件を検証する為の行動と考えると理解できる」と書いた。

8. 空間的側面 には

「賢と亜希子は別の時空間に移動しているのか？」と書いた。

9. 意識的側面 では

「意識の力」と書き掛けてふと、「もしかしたら何らかの意識の力で時空間を移動してしまったのだろうか？」と考えた。祐子はピアガーデン・ヘラクレスに行った日に、賢が数馬に対して「これまでの調査結果から、既に調べた3人が何れも現実の世界とは異なった時空間に移動してしまったようだ」と言い、「その空間から引き戻す為には、こちら側のものとあちら側のものが相互に強い意志で相手呼び求めることが必要なようだ」と話していたのを思い出した。その時は意志という言葉が記憶に焼き付いただけだったが、今考えるとこれが賢達を引き戻す鍵かも知れないと思った。祐子は

10. 判断 の欄にはさっき「賢と亜希子は生存している」と書いたことを思い出し、その文章の前に引き出し記号を書き込んで「絶対」と付け加えた。

「(絶対) ～ 賢と亜希子は生存している」

祐子は満足げに頷いた。

<考察>の欄に

「祐子：20XX年X月xx日、海の老人から100%の愛の必要性を

教わった」と自分の気持ちを書き込んだ。

祐子はノートを閉じて目を瞑った。「賢の意識は必ず自分に向いているはずだ」という確信が一層強くなるのを覚えた。賢の優しさを思い、賢の強い腕に抱かれている自分を思い起こした。感情が高まってきた。ふたりが一つになった時の意識に戻ろうとした。それは不思議な体験だった。目の前に広い海が広がった。海は波が無く凪いで、遠くの金色に輝く太陽の光を映して煌めいている。空には月が出ていてその白い影が太陽の輝きを一層強めている。祐子は思考を止めた。金色の太陽が次第に大きくなって来て海に溶け込もうとした。その時、光が輝いて突然賢の姿が目の前に浮かんだ。祐子は目を開けた。

「あなた！」

祐子は呼んだ。窓のそばに賢が立っている。旅行に出たときの服装を身に着けていた。祐子は賢が出掛けた時の服装は知らないが、少なくともそう感じた。賢一人だった。祐子は立ち上がり、賢のところへ駆け寄ろうとした。祐子が立ち上がったとき、突然賢は消えた。祐子は目を擦ってみたがやはり賢の姿は無かった。気の所為かと思った。しかし賢の姿はあまりにもリアルだった。祐子は大きく息を吐いた。涙が頬を伝って落ちた。急に疲労感が襲ってきた。祐子はがっくり膝を落して座るともう一冊のノートを手にして「明日はこっちだな」と思った。

祐子はロビーのソファに座っていた。沙織が6時丁度にエントランスから入って来た。

「祐子、待った？」

「うん、わたし4時半にチェックインしたのよ。だけど、今日のまとめをしていたから、さっきここに降りて来たばかりよ。ねえ、お兄さんもここに来ているみたいよ」

「えっ！そんなことないと思うけど。気の所為じゃない？」

「ううん、確かよ。こっちを見て頭を下げていたもの」

「変ね、帰ったら聞いてみるわ。ところで、今日はどうだった？」

「おかげでだいぶ進展したわ。どうやら原智明さんも賢くんや亜希子さんも、別の時空間に移ってしまっているようなのよ」

「別の時空間？それって、SF小説みたいね」

「うん、なんか不思議な感じだけど、一寸ホントっぽいよ。だって、今調べている8つの失踪事件はどれも解決していないけど、失踪した人が死んだって報告がないでしょう。どこか別の場所にいるのよ」

「別の場所ね。そこが理解できないところよ」

「沙織、食事まだでしょ。一緒に食べよ」

「うん。だけど、祐子は旅館の食事があるんじゃない？」

「大丈夫よ、ここは夕食がレストランのバイキングになっているから、申し込めば外の客もある程度は受け入れるみたいよ」

「ふうん、わたしも一度この江陽館に泊ってみたかったから、今日は下見ということにするか。ここのお風呂からの眺めは格別らしいわ」
バイキングのレストランは最上階の一つ下の階にあった。窓はガラス張りで、夕暮れになってちらほら灯り始めた灯が鹿児島湾の水面に映り、正面に見える桜島と背景の黒く佇んだ山影を陰鬱な暗さから救っている。このホテルに泊まる大勢の客を乗せたフェリーが光の尾を引いて埠頭に近づいて来ていた。ふたりは窓際のテーブルを確保して、いろいろな料理を集めて来た。沙織は食欲が旺盛と見えて、大皿2枚に一杯の料理を盛り付けている。1枚が和食、もう一枚が洋食と決めているようだった。それ以外にデザート皿にもケーキとフルーツを載せて来た。祐子は大皿1枚にサラダとハム、スパゲティを盛り付けた。

「ねえ沙織、ビールでも飲んじゃおうか？」

「うん、グッドよ」

沙織は上機嫌だ。ふたりはビールで乾杯した。

「ところで祐子、内観さんが亜希子さんと一緒に心配でしょ？」

「ぜんぜん」

「うっそお！」

「本当はね、ちょっと」

「だけど、別の時空間ってどこにあるのかな。空の上かな？海の中だったりして。もしかするとそうかも知れないわよ。だって3人とも海で・・・」

「さあ・・・だけど山で失踪した人もいるのよ。自宅の前とか」
「それじゃあ、やっぱり雲の上かな。まるで竹取物語のお姫様ね」
「沙織、そんなに食べて大丈夫？」
「大丈夫よ。だって、おいしいんだもの。本当はね、先週までダイエットしてたのよ。今は中間休み」
「それじゃあ、痩せられっこないわよ。わたしを見てよ、このスタイル」
「祐子は確かにスタイルいいわ。男の人の視線が気になるでしょ」
「うん、時々。だけど自分の身体の線をじろじろ見られるのはいい気持ちがないわね」
「相手がイケメンなら、いいじゃない」
「やっぱ、嫌よ。何か下心がありそうで」
「家の兄貴なんかも、祐子のことが気になるみたいだったわね。あっ、そうだ、兄貴のやつ祐子の後を追跡^{つけ}していたのかもね。大体外に出るのを疎んじている癖にこんなところに現れるのは可笑しいもの」
「沙織、よく言っといてね。わたしは誰かが予約済だって」
「はっはっは」

沙織が大声で笑ったので周りのテーブルの客が一斉に沙織を見た。沙織は顔を赤らめて目を伏せた。食事を終わるとふたりは祐子の部屋に向かった。廊下を歩いている途中で祐子のスマホが鳴った。藤代登紀子からだった。

「祐子さん、わたくしよ。無事に着いたの？元気かしら？連絡無いから心配していたのよ」

「もしもし、おかあさま。ごめんなさい。いまホテルの部屋に戻るところです」

祐子は部屋の鍵を開けると、沙織を中に誘導しながら話を続けた。沙織は部屋に入ると窓際に進んで外の景色を眺めた。祐子は扉を閉めた。

「初めの日は指宿に泊まりました。亜希子さん達が泊まる予定だったホテルです。そして、昨日は大学の時の友達の家泊めてもらいました。今その友達と一緒にいるんです。今日は亜希子さん達が向かった垂水にあるホテル江陽館に泊まります。調べていて、少しずつ原因究明の糸口

が見えてきたように感じます」

「そう、それは良かったわ。亜希子は見つかりそうかしら」

「まだ何とも言えませんが、今までのものの見方を変えないとだめなようです。わたしだけではとても無理な気がします」

「何かお手伝いすることはあるかしら」

「そうですね・・・そう、亜希子さんがとっても大切にしていたり、いつも身に付けていたりしたものはありますか？それか、いつも亜希子さんの心にある思い出のようなものでもいいのですが」

「それが何か役に立つの？あの子は、あまり物に執着は無かったのですよ。あえて言えばわたくしたちかしら、いつもわたくしたちのことを心配してくれていました・・・」

祐子には、藤代登紀子が言葉に詰まったのが分かった。

「わたくし明日そちらのホテルに行きますわ。祐子さん、ホテルの部屋を予約していただけますか？あなたも一緒のお部屋に泊まりましょう」

「はい、では少し広めの部屋を予約します」

「ええ、そうして頂けるかしら。スイートルームがあればそれをお願いね」

電話を切って祐子は沙織に明日藤代登紀子が来ることを話した。沙織はそれを聞いて言った。

「流石お金持ちね、スイートルームなんて、わたしなんか一生泊まれそうもないわ」

「だめよ、そう思っているとそうなっちゃうわよ。それにこのホテルにはスイートルームなんて無いと思うわ」

祐子は沙織に今日の話をした。そして、明日橘と原智明語録の話をする約束だと言った。沙織は自分も一寸顔を出すかも知れないと言った。8時を10分ほど回ったとき沙織が帰ると言った。祐子はホテルの送迎バスで垂水埠頭まで沙織を送った。沙織を見送ってから送迎バスに戻ると、フェリーから降りた客で一杯だった。祐子はやっと1席確保した。送迎バスは直ぐに出発した。江陽館に着くと祐子は急いでチェックインカウンターに向かい、部屋と人数の予約変更を頼んだ。やはり多人数向

けの20畳の部屋しか無かった。祐子は一応極上コースというコースを頼んだ。部屋に戻ろうとしたとき、ロビーのソファに沙織の兄が座っているのに気付いた。祐子は一瞬ドキッとした。再び不安に似た心地の良くない感覚に襲われたが軽く頭を下げた。沙織の兄は祐子の方に近づいて来て言った。

「あの、祐子さん、一寸話したくて」

「お世話になりました、ご両親にお礼を申し上げます」

祐子は意識して丁寧な言葉を使った。

「一寸いいですか？」

「はい」

そう言うと、祐子は沙織の兄が座っていたソファの反対側の一人掛けの椅子に腰掛けた。

「あの・・・妹が・・・お世話になります」

「こちらこそお世話になっております」

沙織の兄は口下手のようだった。

「あの・・・僕、あの、付き合って・・・も、もらえませんか？」

「えっ！申し訳ありません。お付き合いはできません」

「ど、どうしてですか？ぼ、ぼくが嫌いですか？」

「わたしには結婚相手がおります」

「でも、ま、まだ結婚するって決まった・・・訳じゃないでしょう。そ、それは一体誰ですか？」

「それは答えられません。すみません、では夜も遅いので失礼致します」

沙織の兄は

「あ、あの・・・」

と言っていたが、祐子は席を立ち振り向かずに部屋に向かった。部屋に戻ると、少し間を置いてから浴衣に着替え大浴場に出掛けた。祐子は「もう、どんなことに対しても怖じけることはない」と自分に言い聞かせていた。浴室の入り口の所にまた沙織の兄が立っていた。祐子はびくっとした。沙織の兄は祐子の方に向かって歩いて来た。祐子は無視してそのまま大浴場の暖簾を潜ると、脱衣所の引き戸を開いて中に入りきちんと

引き戸を閉めた。脱衣所には入り口の近くに一人、奥に二人の女性がいて、浴衣を脱いでいた。浴場の入り口付近にも二人、湯から上がって来てタオルで身体を拭っている。その時入り口に近いところで浴衣を脱いでいた女性が「きゃー」と悲鳴を上げた。引き戸を開けて沙織の兄が入って来たのだ。奥で浴衣を脱ぎ掛けていた二人の中年女性はすぐに浴衣を着直すと、「誰かー」と大袈裟に悲鳴を上げた。沙織の兄は構わずどンドン入って来て、祐子が呆気にとられて立っている一番奥の隅まで迫った。悲鳴を聞きつけたのか、頑強そうな係の女性が清掃用のモップを手にして浴場から出て来ると、沙織の兄に向かって甲高い声で怒鳴った。

「すぐに外に出てください」

沙織の兄はそれを無視して祐子の浴衣の袖口を掴もうとした。祐子は「止めてください」

と大きな声で叫んだ。係の女性はモップを逆に持ち替えて、柄の先で沙織の兄の頭を3度ほど打った。沙織の兄は「きっ」となって

「なにすんだよ」

と係の女性に掴み掛かろうとした。その時、暖簾を分けて3人の旅館の法被はつびを着た男性が駆け込んで来て沙織の兄を取り押さえた。係の女性が「皆さん、もう大丈夫です。お騒がせ致しました」

と大きな声で言った。沙織の兄は男達の手を払おうともがいていた。浴室の中から3人の中年の女性が裸の前をタオルで隠しながら、興味深そうに覗き込んでいた。祐子はさっさと浴衣を脱ぐと、覗き込んでいる女性達の間を縫って浴室に入った。後から3人の女性が恐る恐る祐子の後に附いて入って来た。祐子は掛け湯を浴びてから湯船に身体を沈めた。

「あの人、狂ってる」

後で沙織に連絡しようと思った。湯質は硫黄をあまり含まないさらっとした感じだった。ラジウムが多く含まれていると聞いていたので、一寸拍子抜けした。橘が言っていたことを思い出した。「弱い放射線は身体にいい、強い放射線はDNAの鎖を断ち切って肉体に異常を起こす」このラジウム温泉は日本でも強い方だと聞くが、どの程度だろうか

どと考えた。きっと身体にいいんだろうと結論付けて思考を切り替えた。何となく身体にいい作用が働いているような気がしてきた。

「わたしはもっといいスタイルになるんだわ。肌がすべすべになって、あのひともっと興奮しちゃうわ」

祐子は一人で微笑んだ。そして、そんな考えを恥ずかしいと思った。次の瞬間、さっき消えてしまった賢の姿を思い出した。「本当に現れたのよ。きっと何かがいけなかったんだわ。だからまた消えてしまったのよ」と思った。現れたり消えたりするその不安定さに不安を覚えた。祐子はその不安を振り払い海の老人の言葉を思い返した。何が100%なのだろうかと思った。それは橘の言った愛の深さというようなものではなさそうに思えた。同調というのは何だろうかと思った。そして、賢が数馬に話した言葉―「失踪した者が持つ意識がこの世界から求める者の意識と合致すれば生還できるはずだ」―その言葉の持つ意味を考えた。

「私は100パーセントあの人のことに意識を集中していたわ。もしかしたらあの人100パーセントじゃなかったんじゃないかしら。でも、あの人100パーセントが私を愛しているのは間違いないし。私の方にだけ向いていたんじゃないとすると……」

祐子はハッとした。

「亜希子だ」

と思った。消えた時も亜希子と一緒にだった。

「そうだ、賢くんだけじゃだめなんだ。亜希子さんも一緒に戻らないと、きっとこの世界に復帰できないんだ」

と思った。

祐子は風呂から上がって暫くして沙織に電話を掛けた。話しにくいことだったが、思い切って沙織の兄のことを話した。暫く沈黙があつて、沙織が言った。

「兄貴ったら困ったわね。迷惑掛けてごめんね」

電話を置いて布団の上に身を投げると、祐子そのまま深い眠りに落ちた。毛布を丸めて抱きしめて賢を思いながら寝た。フロントからの電話で起こされて朝食も8時半過ぎに摂った。9時を少し過ぎてから、2冊

のノートを無理矢理詰め込んだハンドバッグ一つで身軽にホテルを出た。部屋替えのためトラベルバッグは鍵と一緒にフロントに預けた。登紀子は午後の便で来ることになっている。祐子は空港に迎えに行くつもりだ。